

しけり。(第一卷第三話、私架蔵本八丁裏く九丁表)

げにぞぼさつの来現あつて。加護し玉ふにこそ。おのおの目とめを見合て。随喜のなみだをながしけり。とばかりありて。又目を見上てあれあれおがみ玉へ。ぢざう尊のただいま床のうへにあがらせをはしますとて。すなはち掌を合て。実にまのあたりみたまつりとおぼしきさまにて。教禮の躰いとふかくぞ見えける。かくて夜も明ければ、念仏満数のゑかうもとげぬ。その日もいよいよ心正して。あくる千三日にいたりて。辞世の歌など讀つ。念仏相續して正念に往生しけるぞ、第一卷第五話 前同十一丁表く裏

これひよに本尊 引用者註―地蔵の加被力なりとて。いよいよ信敬の思をましけり。今は有為の雜縁をなげうつて。只ひよに浄土に導玉はん事をいのる。・・・つゐにりんじゆう正念にして目出度往生とげられき。(第三卷第十四話 前同二七丁表く裏

只今又地蔵菩薩来て我に告てのたまはく。この跡は知死期時に随分念仏申せとうんぬん。・・・知死期の念佛おはつて。しばらくあつて。さてもありがたやありがたやと三度高聲みにの玉ひて。その後間もなく眠がごとく往生し玉ひけり。・・・茶毘の時けふりにまじはりて。・・・そのかたち蓮葉のごとくなるむらさきの花ふるを見(第五卷第一話 前同五丁表く裏

身心いと清浄にして。死のきたるをまたれける。同九日に剃髮染衣して。臨終の式をはじめらる。すてに三時の念佛をつとめて。御手の糸をひき。ただ一すじに往生をまたれけり。同二十一日の夜の夢に地蔵菩薩きたり玉ひて。かたじけなくも病人の身ふしをながくさすりて。・・・同廿九日に正念に念仏して。ねむるがごとくおはられき。(第五卷第二話、前同七丁表く八丁表)

『礦石集』には以下のようにある。なお、『礦石集』は法蔵館版よりも、関口静雄・寺津麻里絵による翻刻の方が原型を留めているので、こちらを使用する。『学苑』第八六四・八六九・八七六・八八一号(二〇一二年一四年)に「その一」く「その四」として掲載されているので、以下は「その一・* * 頁」といった形で頁を明記する。

壬生寺ノ童子ノ加被力ニ依テ辞世ノ歌ヲ詠ジ。及ビ浄土ニ生センカ如シ。(第二卷、その二・六九頁、『利益集』第一卷第七話を踏まえていると考えられる)

偏ニ地蔵観音ノ方便ニヤ。・・・辞世ノ歌及夢ヲ思合スニ。浄土ニ往生セン事疑ヒナシ。(第二卷、二・七五く七六頁)

頭北面西ニシテ眠ルガ如クニ往生シケリ。・・・近代稀有ナル臨終ナリ。是モ偏ヘニ地蔵尊ノ加被力ナリ。(第三卷本、その三・

三六頁)

大師ニ帰依シ奉レバ現世安穩後生善處ヲ得ルコト例多シ。．．．偏ニ地藏尊ノ悲願ニ異ナラズ。ハ或説ニ大師ノ本地ハ地藏尊ナリトイヘリV(第三卷末、その三・六〇頁^内は割註 *大師は空海を指す)

『延命地藏菩薩經直談鈔』には以下のようにある。

地藏菩薩ニモ只偏ニ極楽へ臨終正念ニ引導シ玉ヘト祈奉リケル。．．．早臨終ノ期至リヌト覺トテ端坐合掌シ西方ニ向ヒ正念少シモ散ズ念佛十返又地藏寶號ヲ唱ナガラ眠ガゴトク往生シケリ(勉強社版七九〇八二頁、第一卷第十話、『利益集』に類話)

アリガタヤ地藏菩薩ノ迎ニテ弥陀ノ御國へ行ウレシキト讀ツツ念佛相續シテ往生シケルトゾ(前同八四頁 第一卷第十一話 『利益集』に類話)

弥陀ヲ念ズレバ觀音現ジ觀音念ズレバ地藏影向シ地藏ヲ念ズレバ弥陀示現シ玉フ。．．．當ニ三尊ヲ信仰シ七士ニシテ死期ヲ知り正念ニ往生ヲ遂ラレキ(前同八七〇八八頁 第一卷第十三話)

御僧内陳ヨリ香染ノ衣ヲメシ錫杖ヲツキ立チ出テ玉ヒテ。．．．念佛ヲ專要トセバ命終ニハ弥陀安養界ニ引導セント云畢玉ヘハ。．．．(前同二〇二頁、第一卷第二二話)

大日本國洛陽宇加辻子ノ延命地藏ナリ一タビ汝ヂ參詣シ燈明ヲ供養シタル因縁ニヨツテ此 註||冥土ニ来ル古卿ニ歸リナバ先ヅ殺生ヲ止三寶ニ歸依シ念佛ヲ專要トシテ安養界ニ往生スベシ(前同一五三頁 第二卷第九話)

世壽八十ノ三月廿四日ノ曉妻ニ向テ唯今地藏菩薩ノ来迎アツテ此身ソノママ大鳥ニ乘天上スト暇ヲ乞テ東方ニ向テ地藏ノ寶號ヲ三返アマリ唱ケレバ異香室内ニ薫シ紫雲天ニタナビキ天上ジ。．．．(前同一九二頁 第二卷第三七話)

大坂住人父子生地蔵浄土縁

．．．其ヨリ一家三十地藏尊ヲ信仰シ奉ル是偏ニ地藏菩薩ノ利益ナリハ無盡蔵ノ説V此即地藏尊ヲ信敬シ地藏ノ浄土ニ往生シタル其證ナリ(前同三五四〇三五五頁 第四卷二九話)

第四卷第二九話の本文には後生善處が明言されていないが、題名 註釈に述べられている。『直談鈔』の引用を続ける。

汝彌信敬セバ命終ノ直下ニ我加被シテ安養ノ樂邦ニ引導ベシ我新善光寺來迎地藏ナリト化シ去リ玉フト夢覺一ケリ前同五八八頁第八卷第十三話

極樂ノ聖衆地藏菩薩示現シ玉フト感見シ玉ヒテ前同七二三頁第十卷第二九話

上人臨終ノ前七日以前其身ヲ現シ死期ヲ知セ我ヲ加護シテ安養ノ淨刹ニ引導ベシト前同七四〇頁第十卷第五十話

夜菩薩夢一來テ告テ云汝明後日死スシ・我守護シ決定シテ安養ノ淨土ニ引導スベシト前同七九八〜七九九頁第十一卷第五一話

地藏菩薩ノ引導ニ乘シテ安樂國ニ往生セリ前同八二三頁第十二卷第十一話

或年ノ夢ニ地藏告テ言ク何ノ月何ノ日必ズ汝往生スベシ彌一心ニ念仏セヨ我其トキ臨終ヲ加護シテ弥陀ノ淨國ニ引接セント示シ玉フ・正念ニ念佛シテ眠ガ如ク西方一向ヒ端座合掌シテ息絶ヌルトナン(前同八二六頁第十二卷第十五話)

臨終ニ及シテ病苦ナク死期三日前ニ觀音地藏ノ來迎ヲ拝見シ正念ニ眠カゴトク往生セラレントト(前同八三四頁第十二卷第二三話)

一夜ノ夢ニ菩薩娘ヲ連來リテ言ヤウハ・・・汝彼ガ後世ヲ一向我レニ頼ム故ニ地獄ニ落テ居タレトモ我コレヲスクヒ天上ニ送ルナリ(前同八三四頁、第十二卷第二四話)

其ノ日ノ暮方ニ目覺テ家ニ還ント思フトキ地藏菩薩アラレ出テ玉テ・我ヲ念セバ我レ臨終ノトキ弥陀ノ寶國ニ引導ベシ(前同八五七頁第十二卷第五五話)

『続礦石集』には以下のようにある。

汝累年地藏菩薩を信仰し頼み奉るに依つて。兜卒の内院に引導し玉へるものならん。(上卷第十三話、法藏館『通俗礦石集 後編』四二頁)

六根不具足にては。未來の成佛も障ありと承りし故に。何とぞ六根具足して。目出度往生を遂たく願ひ奉り。殊に地藏尊を歸命し奉りしに。(下卷第十三話 前同一三二頁)

『地藏菩薩応驗新記』には以下のようにある。

或る夜の夢に、仁右衛門、十輪堂へ拝詣し本尊を礼拝し奉りに、菩薩宝龕を出て狭間戸の辺に來らせ給ひ、「汝が亡子の生所を慮て

我に祈りしほどに、我即善処に引導しぬ。……と。(上本第三話、国書刊行会『仏教説話集成「二」』二四頁)

常に持念する所の菩薩、時々夢中に告て曰、「汝這回甚だ難産也。是生々の業纏に因れり。然れども我が慈濟力を運し、重障を転じて安産を得せしめん。報命は此期に在て必ず救ふこと能はじ。来世の生所は我まさに引摂すし。……」(中本第三話、前同四七〜四八頁) 二十日の夜、夢に……菩薩言く、「汝が主人五兵衛は、今日既に死門に赴なり。汝は報縁いまだ尽ず。まさに娑婆に帰るべし。五兵衛居常篤心にして我を信ぜし、其所虚しからず。即今安養浄邦に赴しむる也。……」(中本第十話、前同五五頁)

昨夜の夢に、地藏菩薩金欄の袈裟を着し、大なる錫杖を策来り給ひ、「我は是聖尊寺の地藏也。汝我に帰敬すること最稔し。九月朔日には我来て汝を安養に引摂すべし。……」とて……(下本第六話、前同七六頁)

毎月二十四日には殊に像前に拝詣し、称名持念して、「臨終に来迎し給ひて浄土に引導し給へ」と祈けり。……夜夢むらく、其長五尺許、端巖殊妙の地藏菩薩、袈裟を被し錫杖を卓て、独觀(註―主人公の名)が牀頭に立せ給ひ、「独觀独觀、死期今夕に在。多年の所願に応じて、汝を来迎ふる也」と……(下本第十話、前同八一頁)

婆子六十七歳 家人に語て曰、「菩薩の御手より藕糸を繰出して我手の十指を授給ふ。二十四日には西方極樂に引摂し給ふ」とて……二十四日の晨朝に、少悩だも無ふして、合掌称名し、「菩薩来て我を摂取し給ふ」とて、端坐して脱脱しけり。(下本第十四話、前同八六頁) 女曰、「我今菩薩の来迎にて往生すと。伯母に水を乞 快く飲て称名し、合掌端坐、溘然として坐化す。(下末第八話、前同二〇二頁) 『諸仏感応見好書』には以下のようにある。

念持仏(註||地藏)を以て本尊と為して、終焉の夕に迄で仏徳を仰ぎ、往生する也(原漢文を返り点に従て書き下した。国書刊行会『仏教説話集成 二』八二頁)

地藏の宝号を唱ふこと、一日一夜す。不思議なるかな、墓の下より声出して云く、「我二百年來 惡道にして苦を受くること限り無し。今受戒の法衣の力に依て福田衣を披し、解脱の妙道に至り、生天得果すと。(前同八五頁)

『本朝諸仏冥応記』には、以下のようにある。

其庭(引用者補―冥府の裁判所の庭の意)の人皆此小僧を見て、「地藏菩薩来り給へり」といふ、……時に小僧女に告げてのた

まはく、「汝われをしるやいなや。我は是三途の苦難をすくふ地蔵菩薩なり。我汝を見るに大善根の人なり。命をすくふべし」・
・又のたまはく、「汝極楽に往生すべき縁あり。今其要句ををしゆべし。ゆめゆめわれうれざれ」とて・・八十歳にして、
心たがはず端座し、口に念仏を唱へ、心に地蔵菩薩を念じて入滅しけりとあり。(国書刊行会『仏教説話集成「一」』二五―二六頁)
地蔵説話集ではないが、浅井了意『伽婢子』(一六六六年刊)には産死した妻の後生善処を地蔵に祈る話がある。

妻その死するとき、法成寺の地蔵堂にまかひ手を合せ、「年月日比念願し奉る。かまへて本願あやまり給ふな」とて、地蔵の宝号
をとなへておはりぬ。加賀守もおなじく此菩薩に帰依して、「妻が後世みちびき給へ」と祈りしに、(新日本古典文学大系『伽婢
子』一四八頁)

但し、この話は、妻が一旦蘇り、また亡くなるという筋である。(亡くなった後、後生善処に行けたかどうかは明示されていない。)

妻ある日の暮がた、なみだをながしていふやう、「我はまことの人間にあらず。君とはまだ縁深かりし故に、上条の地蔵ぼさつ冥
官におほせて、たましゐをゆるしはなちて、三とせこのかたのちぎりをむすばせ給へり。今はえんすでにつき侍り。・・・」(前
同一四九頁)

蘇ることができたのは、地蔵が冥官に申し入れたからだが、地蔵と閻魔との一体論は明示されていない。

確かに渡の云う通り、数的には後生善処の話の割合は、中世と比べて、大幅に減少している。しかし、各地蔵説話集に後生善処説話
がおおよそ一話以上あり、このことは時代が下っても(新しい説話を収めた説話集でも)、変わらなかった。また、多くの地蔵説
話集に於いて、以上の引用以外に、一旦亡くなって冥府に到るが地蔵に救済され、生き返るといふ意のV蘇生譚が一話以上存する。

これに当てはまらないのは、『続礦石集』・『地蔵尊利生記』・『本朝諸仏霊応記』・星野本『地蔵菩薩靈験記』であるに過ぎない。

「数的」問題に関し、二つ註釈を加える。一つは、中世と比べる場合の母集団が異なることである。第二部で述べた通り、中世に於
いて、地蔵説話集は編纂されなかった(靈験記絵の類は除く)。そのため、本論文第二部では、様々な説話に言及された地蔵の記述を
かき集めて分析を行った。一方、江戸時代は、多数の地蔵説話集が編纂され、多くは出版された。このため、中世と江戸時代とは、
地蔵説話の総数が大幅に異なるし、その性格も異なる。母集団が異なる以上、厳密に言えば、数的比較はできない。

第一点を絡めて考えなければならぬ問題として、江戸時代が檀家制という、仏教が国教であった特殊な時代であったという問題が挙げられる。日本人は誰しも、どこかの寺の檀那になる義務を負い、檀那になるということは、葬式・法事等の死者供養は、当該の寺の言いなりになるということである。とすれば、死後の事柄は、寺に全面的に委ねるということであり、新たな後生善処説話は生まれにくい。一方、第一章前述の如く、檀那だからといって、現世利益まで檀那寺の言いなりになるという必要はなかった。であれば、勢力拡大のため、各寺は、現世利益的奇瑞を宣伝するようになる。このため、江戸時代の地蔵説話集では、現世利益の話が多く収められるのである。無論、母集団の問題を除外しても、後生善処の話の数は減っている。しかし、各説話集に各一話以上あるということは、後生善処の機能が消滅したという訳ではないのである。

なお、最後に他の仏・菩薩との比較を試みたい。中世に於いては、観音も地獄からの救済を担っていた。この機能は江戸時代に消滅した訳ではない。『観音冥応集』には以下のようにある。

地獄ノ門ニ近付テ見レバ、百丈丈ノ火炎燃アガリ、・・・時ニ童子一人忽然トシテ来リ玉ヒ、我地獄ニ墮セントスル処ヲ、手ヲ取テ引返シ共ニ焰魔王宮一至テ冥久、安基 註一主人公ガ罪ヲ赦シテ我ニ返玉ト。・・・其後出家シテ罪障ヲ懺悔シ、一生長谷寺ノ観音ニ奉仕シ、・・・(第一巻第八話 和泉書院版二五頁)

また、江戸時代に於いて、宗派によつては、「観音懺法」といって、観音を活用した、葬祭儀礼も行われていた。

後生善処の機能に関し、第三章では江戸時代に盛んになった、地蔵像造立から分析したい。というのも死者供養を目的として、路傍に地蔵像を立てることは各地で見られるが、観音像を立てることは稀であると見込まれるからである。

* 『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』は、榎本千賀・他編『一四巻本 地蔵菩薩靈驗記(上)・(下)』(二〇〇二・〇三年 三弥井書店)より引用。『地蔵感応伝』・『地蔵菩薩利生記』・『地蔵菩薩利益集』は、私架蔵本より引用。『延命地蔵菩薩経和談鈔』は、鶴見充展「翻刻『延命地蔵菩薩経和談鈔』(一)」(『東洋大学大学院紀要』第二二号 一九八六年)より引用。『鑽石集』は、関口静雄・寺津麻里絵「惟宝蓮体『真言鑽石集』翻刻と解題(その四)」(『学苑』第八六四・八六九・八七六・八八一号 二〇一二〜二〇一四年)よ

り引用。『続礦石集』は、『通俗礦石集 後編』（発行年代不明 法蔵館）より引用。『地蔵菩薩心驗新記』は、『仏教説話集成「二」』（一九九八年 国書刊行会）より引用。『諸仏感応見好書』・『本朝諸仏靈応記』は、『仏教説話集成「一」』（一九九〇年 国書刊行会）より引用。

1 渡浩一『お地蔵さんの世界』（前掲）三七頁。

2 関口翻刻本は、初版を底本とするに対し、法蔵館版は三版を底本とするので、どちらも蓮体の著作である（Ⅱ法蔵館版に後世の人の手が加わっているとかいう訳ではない）。一番大きな相違は第一巻第一話の差し替えである。初版では、「地蔵菩薩女人ノ横死ヲ救ヒ玉フ事」という地蔵説話が記されているが、三版では、「地蔵菩薩種々利益ノ事」という地蔵信仰概観に代わっている。この変更の理由を、西島孜哉は、幕府による出版禁令と連関した自己規制とする。「出版禁令と書肆・作者―『礦石集』を題材として―」（『鳴尾説林』第四号 一九九六年）。一方、関口・寺津は、蓮体の居住する地蔵寺に藩主から九華山という山号が贈られたことを差し替えるの原因としている。「惟宝蓮体『真言礦石集』翻刻と解題（その四）」（前掲）。私としては前者の方が説得力があると判断したので、今回は初版を使用した。両テキストの比較は、機会を改めて、総合的に論じたい。

3 徳野崇行「片仮名本『因果物語』にみる近世禅僧の供養儀礼」（『駒澤大学仏教文学研究』第十八号 二〇一五年）は、曹洞宗で行われたとするが、中村元『広説仏教語大辞典』では、江戸時代まで天台宗で行われていたとする。

第三章 路傍の地蔵像の造立目的

序で述べた通り、日本地蔵信仰の一つの特色として、路傍に地蔵像が祀られることが挙げられる。路傍の地蔵像が造立されるようになるのは江戸時代以降とされる。また、その原因として、道祖神との習合が挙げられてきた。

しかしながら、道祖神との習合に関し、私は長年疑問を持ってきた。というのも中世及び江戸時代の地蔵説話には、道祖神との習合を説いたものが見当たらないからである。『延命地蔵菩薩経直談鈔』に道祖神は登場するが、地蔵との関係は説かれていない。

道祖神ト云ヒ又ハ道陸神或ハ幸神トモイヘリ神職ノ人云道祖神トハ本朝猿田彦コレナリ（前同六二〇頁）

また、道祖神の特徴として、多くの地域に於いて、小正月に火にくべられるというものがあるが、路傍の地蔵像で小正月に火にくべられるものは皆無である。

では、路傍の地蔵像は如何なる目的で造立されたのであろうか？ 日本全国を悉皆調査する訳にもいかないので、本論文では、東京

23区域・金沢市・京都（うち旧平安京城）の三地域の分析を行う。

第一節 東京23区域

章末表Aは、当該地域に於いて、銘文・伝説等から造立年代が推定される路傍の地蔵像を年代順にまとめたものである。なお、東京23区域を調査対象とした端緒は、三吉朋十の業績の存在だが、これでは不十分で、世田谷区『地蔵及び諸尊』等の調査書を活用した。

調査済地域を武蔵国域に広げるため、当該地域周辺も調査中だが、完了していないので、今回は23区に限定した。残念ながら、造立年代が推定されたものの中に、筆者独自発見はほぼ無かった。

銘文を見ると、造立目的が記されているものの中には、「二世安楽」（もしくはこれに類する語句）が記されているものが多い。造立主体が記されている場合、「念仏講」が多い。これらの地蔵像は後生善処を一目的に造立されたと想定される。

道祖神の主職能の一つである、疫病退散を職能とするものは、A 42（一六九二年造）・A 80（一七一九年造）・A 180（一七九七年造）である。三体とも村境に立てられている。但し、当時は未だ疫病を引き起こすのは、御霊の崇りと考えられていた時代である。立地

と疫病退散の職能以外、道祖神との共通性は認められない。地蔵像を造立するに先立って、当地とその周辺に、一六〇〇年代に道祖神信仰が存した痕跡は無い。ゆえに、この三体が道祖神と習合して造立されたとは解釈するのは難しい。なお、初期（一六〇〇年代）のものには庚申との習合が見られ、それらは二世安楽を目的とするものが多いことは重視すべき事柄である。具体的には、A 12・A 15・A 18・A 23・A 24・A 27が該当する。同時期造立で、寺境内に祀られる地蔵像でも庚申との習合が見られる。庚申はもともと二世安楽を祈る対象であり、板碑等に彫られるものである。東京23区域とその周辺は板碑造立が盛んだった地域であり、江戸時代になると、庚申型板碑が造立される地域でもある。路傍の地蔵像造立の一因として、庚申信仰（特に庚申型板碑）との習合が挙げられよう。

東京23区域の、路傍の地蔵像は、錫杖・宝珠を持ったものが多い。前述の如く、この形は死者供養を担うものと解釈できる。『法然寺旧蔵本 地蔵菩薩靈驗記絵』に於いて、地蔵が錫杖を以て、地獄の鬼に対抗しようとしていた（第二部第九章第四節前述）。地蔵が地獄の鬼に対峙するというモチーフは、江戸時代、遊戯「比々丘女」を生み出し、現代の「鬼ごっこ」の原型となった。従って、江戸時代に於いて、錫杖を持つ地蔵は鬼を退治するものと考えられていたと推測できる。

表Aを見ると、錫杖・宝珠を持つ形態以外では、合掌形も多い。合掌はそもそも仏に対する儀礼である。現代日本では、死者を仏と呼ぶことがある。但し、この意がいつ頃生じたか定かではない。一六〇三年刊『日葡辞書』Fotageには、この意は述べられていない。

日本人がこいねがうイドロ (Idolo 偶像)。また、時にただ釈迦 (Xaca) だけの意に用いられる。(前同二六五頁)。
『日本国語大辞典 第二版』では、『世間娘気質』一七一九年の用例が挙がっている。

五躰^{ふく} 鰯汁^{ほとけ}で 仏^{ほとけ}となる魚屋の亭主、度々の平産は年中一所で礼銀を取揚婆々、諸方よりの形見を金置たてて見るまま子算。(新日本古典文学大系『けいせい色三味線 けいせい伝受紙子 世間娘気質』四七五頁・振り仮名も同書による。)

なお、『世間娘気質』には、死者を祀る仏棚の存在も記している。

つれあいの仏^{ほとけ}棚^{ほとけ}もかざらず、蓮の飯を祝ふべき始末もなく、(前同四八五頁)

『世間娘気質』は、女性の生き方を事例から示した本である。西鶴の模倣・剽窃が多いとされる。であれば、著者・江島其磧は、独創的な文筆家とは思えない。死者を仏と呼ぶ用例が一七一九年頃には定着していたと考えられる。なお、地域限定ではあるが、東京23区域の、

路傍の地藏像に於いて、初期の合掌形は、A 16 一六七一年造・A 19 一六七六年造・A 43 一六九三年造である。A 19 A 43 は、銘文から死者供養を目的としていたと解釈できる。そうなると、銘文の件と合わせて、合掌形地藏像も死者供養を目的としていたと考えられる。なお、A 31 は、処刑者を供養するために造立されたと伝わる¹⁰。これが事実であれば、非業の死者を供養することを目的としていた事例となる。また、A 64 は、元禄の飢饉で亡くなった死者を供養するために造立されたと伝わる¹¹。

像の素材から造立の背景を考察したい。破壊検査をする訳にはいかないので、目視の範囲で云うと、東京23区域に於いて、路傍の地藏像は、いずれも灰色に近く、多くは安山岩を素材としていると考えられる。当該地域及びその周辺では、火成岩たる安山岩は産出しない¹²。安山岩は伊豆半島及びその周辺から産出された。江戸幕府の命で、安山岩は船で運ばれ、江戸城石垣等に使用された。その数は二〜三〇〇万個と云われている¹³。ちなみに「大石」のまま運ばれる¹⁴ので、二〜三〇〇万というのは、大石の数である。大石がほぼそのまま城垣に使われる場合もあっただろうが、用途によっては加工されたと考えられる。また、移動中に破損したものもあっただろうから、当然、余り石も出てくることが想定される。一例だけであるが、A 178 には江戸城築城の余り石で造られたという伝承がある「写真一・二」。表Aを見て分かる通り、当該地域で地藏像造立が盛んになるのは一六六〇年代以降である。一六六〇年代というと、寛文検地（一六六一〜七三）が行われ、村割が定まり、当該地域が安定した時期である。江戸城築城が一段落するのは、これに先立つ、一六四四年である¹⁵（但し、その後も地震・火事等による修理工事は行われる¹⁶）。石垣の素材である安山岩は大石のまま運ばれるので、石垣用に加工する石工が多数、江戸にいたのである¹⁷。多数の石工は、江戸城普請が一段落すると失業してしまう。石も余っている。そこで、村の人々の要請に応える形で、地藏像を掘り出したのである¹⁸。ちなみにこうした石工は穴太衆の流れを汲んでおり¹⁹、仏像を彫る技術を有している者もいたと考えられる。この説の傍証として、路傍の地藏像を彫った石工は、おおよそ江戸市中だからである（但し、石工の情報が分かる事例は極めて稀である）。A 21（一六七七年造）は現・板橋区大谷口在であるが、彫ったのは、「江府駒込」の石工である。A 143（一七五三造）は、現・練馬区大泉在だが、彫ったのは、「江戸新橋」の石工である。A 172（一七八四年造）は現・板橋区中台だが、石工は「神田」である。例外は、A 154で現・杉並区堀ノ内在であり、石工は「当邑」の者である。

なお、本章は、路傍の地藏像に関して論じているが、江戸時代の江戸周辺地域に於いて、石造物は基本、安山岩によっていることは

既に先行研究の指摘がある²⁰。

なお、他の仏・菩薩との比較を試みると、路傍に造立される像は地蔵像が多いが、馬頭観音も多い。但し、馬頭観音を除けば、観音像は少ない。例えば、現・練馬区域に於いて、江戸時代に造立されたと想定される、路傍の地蔵像は、計二九体だが、馬頭観音は、計十八体造立されている²¹。確認すべきは、聖観音は、体²²、観音供養塔が一体²³、六観音勢至石幢が一体²⁴しか造立されていないことである。馬頭観音は、馬供養や交通安全を祈るもので、路傍の地蔵とは職能が異なる。江戸時代は、地蔵の死者供養の職能が定着し、路傍に造立されるのは地蔵、という観念が一般化した時代と云える。但し、聖観音像を造立することが皆無であったという訳ではない。

〔写真一〕A 178・豊島区長崎一―九―二在（西武池袋線椎名町駅前）の地蔵像に対する説明版。江戸城築城の余り石で作られた伝承を記している。二〇一〇年九月撮影。

地蔵尊の由来

地蔵尊は、寛政八年（一七九六）八月二十四日に道標みちすゑをかねて造立された。地蔵尊の石中には「念仏供養」、その左右には「北・下板橋道 南・」という文字が刻まれています。ほりの内というのは、杉並区堀ノ内のことだ。宿場町として栄えた中山道の板橋区仲宿方面、また厄除け祖師のへ、お参りする人々の道しるべになっていて、南北に通じる道があったとされています。また、この地蔵尊の御仏体は、江戸城築城の時に使われたと云い伝えられています。

薩真言 おんかかかびさんまえいそわか

薩宝号 南無地蔵菩薩

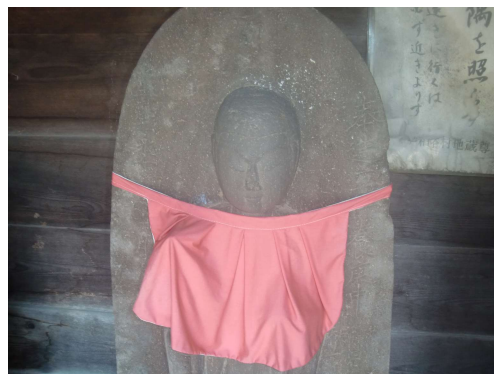


「写真三」世田谷区粕谷三―三三の石仏群。右の地蔵像、左の如意輪観音坐像に関しては、『地蔵および諸尊』に言及があるが、中央の地蔵像は未掲載。二〇一二年九月撮影。

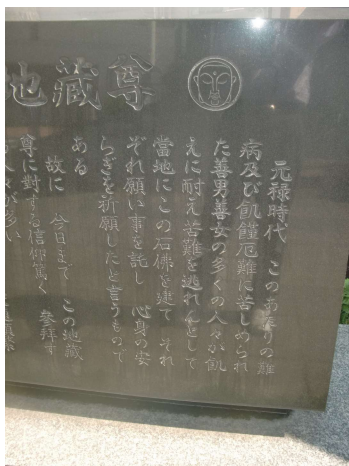


「写真二」「写真二」A 178の地蔵像。右下に説明版が見切れている。

「写真四」写真三・中央の地藏像（A 64）。舟形光背の左に「宝永」の字が読み取れる。



「写真五」写真三に対する現地説明版。元禄の飢饉を契機に造立されたとする。



「写真六」 A 31・牛窪地蔵の地が処刑場であったことを現地説明版は述べている。二〇一四年二月撮影。

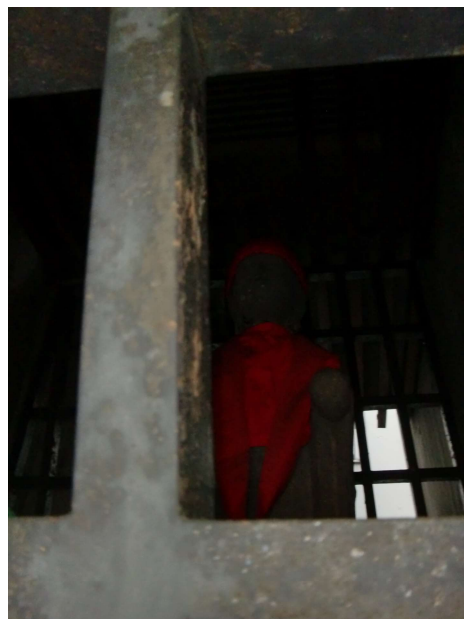
牛窪地蔵尊は今を去る二六〇年前（
）以前この地は極悪人の刑場として牛を使
刑という両足から股を引裂く酷刑場の地
この牛と窪地であったことから牛窪の地
共に幡ヶ谷地方の雨乞行事の場所として
室永より正徳年間にかけてこの地に悪疫
の霊のたりだと伝えられ子供の子安泰を守
地蔵としてこの淋しい土地に地蔵尊を祭り霊を
道供養塔は中野通りから甲州街道につきま
しるべしとわかり易く当時行路者の行き
く篤志家によって建てられたものである。

昭和四十年頃より急激なる自動車の発達に伴
急増昭和四十五年五月甲州街道の拡幅により移
れ約十八メートル後退の当所に地元正徳会委員
り移設建立し当地の文化施設として永久に保
其の竣工をみた。謹んで諸霊の冥福を祈る。

一九七〇年五月十六日（昭和四十五年）

有志 橋上
有志 長谷

「写真七」A 31・牛窪地蔵。格子越しの撮影である。



1 真鍋広済『地蔵菩薩の研究』（前掲）二〇頁。但し、狂言『金津地蔵』は、田舎者が京に於いて地蔵像造立を頼む筋である。従って、江戸時代以前から、本論文で云う庶民が地蔵像を造立することはあり得た。

2 真鍋広済『地蔵菩薩の研究』（前掲）二〇頁・渡浩一「地蔵」（大島建彦・他編『日本の神仏の辞典』二〇〇一年 大修館）。

3 例外としては、茨城県古河市高野にあるロウソク地蔵が挙げられる。但し、火をくべられるのは、八月二三日二四日の地蔵祭りの際

であり、小正月に火をくべられる道祖神とは時期が異なる。長沢利明「地蔵は燃える、人々の願いを背負って」(『望星』第四一巻第八号 二〇一〇年)。

4 東京都世田谷区教育委員会『地蔵および諸尊』は、粕谷三―三三に地蔵像(造立年代不詳)・如意輪観音像(一六九一年造)があることを指摘するが、現地に赴いたところ、「写真三」中央の地蔵像の銘文に「宝永」の字を読み取ることができた。そこで表Aに記載した(A 64)。「地蔵および諸尊」が指摘する、造立年代不詳の地蔵像は写真右。

練馬区教育委員会『練馬の石造物 路傍編(一)・(二)』(一九九一―九二年)に未掲載のものとしては小竹町二―二八(アパート小竹脇・八雲神社そば)の合掌地蔵尊を発見した。形態や八雲神社裏という立地場所から推測するに、江戸時代造立と考えられるが、造立年代は不明。他に墓標らしきものが並列しているので、「忘れられた地蔵」というより、「忘れられた墓地」という方が適切である。

5 安丸良夫「民俗の変容と葛藤」(『安丸良夫集4』二〇一三年 岩波書店 *初出一九八六年)。

6 平野実『庚申信仰』(角川選書 一九六九年) 一四一頁。

7 『骨董集』に「今童遊びに、子とろ子とろいふ事をすめり。これいと古へは比丘女といへり。その原は、恵心僧都経文の意をとり、地蔵菩薩、罪人をうばひ取給ふを獄卒取かへさんとする体をまなび」とある(『日本随筆大成15』五二二頁)。

8 寒川恒夫「鬼ごっこ「比々女」の起源に関する民族学的研究」(『遊びの歴史民族学』二〇〇三年 明和出版)。

9 長谷川強「解説」(新日本古典文学大系『けいせい色三味線 けいせい伝 世間娘気質』)。

10 一九七〇年に立てられた、現地説明板「写真六」による。

11 一九八〇年に立てられた、現地説明板「写真五」による。

12 金子浩之「伊豆石丁場」(林英夫編『事典しらべる江戸時代』二〇〇一年 柏書房)。

13 野中和夫「伊豆の石丁場」(野中和夫編『石垣が語る江戸城』二〇〇七年 同成社)。

14 『慶長見聞集』に「先年江戸城石垣をつかせらるるによつて、伊豆の國にて大石を大船につむを見しに」(第九卷、江戸叢書版第二

卷二五六頁）とあるによる。

15 金子浩之「江戸城石垣石丁場関連遺跡」（『月刊文化財』第五四八号 二〇〇九年）。

16 鈴木理生「災害と江戸城」（『江戸と城下町』一九七六年 新人物往来社）。

17 北原糸子『江戸の城づくり』（二〇一二年 ちくま学芸文庫）一四二頁。

18 同時期、同地域に於いて庚申塔の造立も盛んになるが、この点について、江戸城普請が一段落したことを原因とする説が既に出されている。小花波平六「江戸・東京の庚申塔」（大護八郎編『日本の石仏 南関東篇』一九八三年 国書刊行会）

19 註17に同じ。

20 坂詰秀一「江戸に於ける伊豆石の世界」（『石造文化財』第三号 二〇一一年）。

21 練馬区郷土資料室『練馬の石造物 路傍編 その一・二』（一九九一・二年 練馬区教育委員会）に由る。なお、同書に記述があるが、現地調査の結果、見当たらなかったものを数字に含めた。このため、表Aとは数字が異なる。

22 練馬区豊玉北一―七在、一六六三年造。同区中村南二―十九在、一七四〇年造。同区羽沢二―九在、一七七七年造。同区北町二―三八在、一六八二年造。

23 練馬区上石神井一―十一在、一八四二年造。

24 練馬区中村三―十一在、一七四〇年造。

6	5	4	3	2	1	
品川 区大井	新田 二宿 四区 早稲	板橋 ・区 仲文 殊宿	豊島 区 千早	北 一 区 王子 本	板橋 二 区 大 西谷	所現 ・ 所 在 場
一 六 五 五	一 六 二 六	二 五 一 六	戦 国 時 代 ?	一 五 五 三 二	中 世 ?	代 造 立 年
舟 形 立 像 ・	錫丸 杖・彫 宝立 珠像 ・	丸彫 左彫 足坐 を像 上	丸彫 抱坐 き像 ・宝	丸彫 合掌 ただ 留め め古 戦	丸彫 杖・彫 宝坐 珠像 ・	形 状
(右)						銘 文
倉 田	落 馬		子 千 育 早	子 王 育 子	職 能 し 苗 く 字 は も	
も と は 大 井 四 一 二	よ 立 う で る 年 伝 代 承 も あ し 伝 り た 承 と に 造 い 地	述 風 あ り 土 境 記 内 稿 が 縮 に 小 記	伝 わ る に あ つ た と 地	に 造 る 年 代 は 一 十 五 年 に 造 ら れ た と い う が 、 一 五 五 三 二 年 に 造 ら れ た と い う 説 も あ る 。	地 名 が 残 る と い う が 、 一 五 五 三 二 年 に 造 ら れ た と い う 説 も あ る 。	註 記

表A…東京23区域の、路傍の地蔵。銘文等から江戸時代（及びそれ以前）造立と推定されるものを年代順に並べた。文献には記載があるが、現地調査で確認できないものは除いた。現在は、路傍ではないが、かつては路傍にあったであろうものは含めた。銘文の△▽内は割書。苗字・職能は複数持つものもある。『風土記稿』は『新編武蔵風土記稿』の略。

13	12	11	10	9	8	7	
杉並区井草	文京区大塚 四、四、九、二	足立区加賀 二、六、加賀	杉並区高円寺 八、南、高、四、十 開運子育地 蔵堂	墨田区高砂 五、四、七、五	葛飾区鎌倉 三、四、三	中野区中央 三、三、三	四、二、光寺、十
一六六七	一六六五	一六六四	一六六四	一六六三	一六六三	一、六、六	
舟形立像	丸彫立像 錫杖・三宝珠	錫杖・彫立像 宝珠	笠付六面 幢	舟形立像 錫杖・宝珠	舟形立像 錫杖・宝珠	丸彫立像 錫杖・宝珠	錫杖・宝珠
(右) 寛文七八丁未	安樂施工石仏一尊(左右)	*庚台□座に施主名九名		薩(右)奉祈造立地蔵菩薩(左)寛文三年	九(右)吉日□衛(左)奉造□尊□	明曆(背面)寛文永正保	天(右)ちよつ妙譽日お 窓(左)十二月廿四日 お観たつ□道西妙曉
			子育	子育	鼎		
井草観音も一六	もとは大塚五、九 村と境。村と巢鴨	弥陀堂にあり。阿	留の稿年移二年な現 めたに『代さ丁間れ・高 ずめよる『る二高も円 原。風。又円、寺 形戦土造よ寺大境 を災記立り南正内			わはの園れ現 る付下第ど・慈 近で三、も眼 のそ小と寺 辻れ学と寺 と以校は在 伝前櫻桃な	倉二田十三、現大井

20	19	18	17	16	15	14	
世田谷区桜 一丘二田二九	寺南五区高円 二寺南五区高円	杉並区高円 地蔵堂・下島道	北區豊島区 一三九弘道	豊島区滝野 川三三七	北區豊島区 地蔵堂・下島道	豊島区駒込 二島一駒込	一井三觀十音 堂井草觀十音
一六七六	一六七六	一六七五	一六七二	一六七一	一六七〇	一六六八	
錫杖形立像・ 舟形立像・	合舟形立像・	錫杖形立像・	錫杖形立像・	合舟形立像・	錫杖形立像・	錫杖形立像・	錫杖形立像・
養己兔眼顔堂辰 地念山口口安V 蔵仏門開全置九 之(義地月于時 増以左要課蔵吉 余願)職題仏祥延 子力伏金主奇日宝 繁奉以為妙八 昌供各金正容一丙	日妙月(右) 善三(右) 童日蓮延宝 女蓮經三童四 子月(十左)二 十六	白芻乙世(右) 豐卯(右) 嶋V(左) 郡一(左) 豐月延養 嶋吉宝庚 村日三申 敬武八二	日(衆左二)右 茂左世奉念 左門文安樂仏 口十処供 二 年牧養 吉口結	寛文(右)十一口 門嶋(善衛門)金十 善衛門金十 善衛門金十	V悉(右)成九就 天九就月吉日 郎權十郎 豐嶋之 善衛門金十	錫杖形立像・	同V行年十二月吉辰(左)
				子育		育坂妙駒 子義込	
在家村との境。經堂		阿A 弥15 陀と 道同 沿位 置。 六				六阿弥陀道沿い。 る井造。家立 。家立 古年代 文代書は に、よ今	六七年造。

27	26	25	24	23	22	21	
地蔵堂 北十区豊島道 二卷五田谷区弦	世田谷区 一田二谷区四代	世田谷区 一田二谷区四代	世田谷区 二田三谷区二若	練馬区 一馬十区八小竹	足立区 三立区栗原	板橋区 二橋区三大谷	
一六八三	一六八二	一六八一	一六八一	一六八〇	一六七九	一六七七	
錫舟杖形立宝珠像	錫舟杖形立宝珠像	錫舟杖形立宝珠像	錫舟杖形立宝珠像 猿下杖部に宝珠三	錫舟杖形立宝珠像	錫舟杖形立宝珠像	錫丸杖形立宝珠像	
十月四大日武同行男女三十	二月三日八亥	念仏元年酉十月十五	廿五日九年十月九日	野八兵衛八郎志	平木延宝七年	上板橋大谷村	剎廻之蓮華也敬白 善尊功徳六輪 之惡果速到九品 故口口轉道輪 口口徳口也福 淨壽薩
下道							
阿弥陀道沿い置。六			他に地藏像・庚申塔。	他に庚申塔？等。			

35	34	33	32	31	30	29	28
三台 一六 東区 浅草	前三 立善 区中 寺川	見練 台馬 四区 一五 富士	地十 蔵六 堂・ 下島 道四	谷一 一谷 一區 幡ヶ	八葛 一飾 七区 立石	育町中 英二野 地四區 蔵二大 堂・和	二北 一區 〇西 ヶ原
四、一 一六 七八 〇八	一 六八 八八	一 六八 八八	一 六八 八七	一 六八 八六	一 六八 八五	一 六八 八五	一 六八 八五
宝像丸 珠・彫 錫光 杖輪 立	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像
	一月 廿六 日 元祿 元戌 辰十	二右 年十 八七 戌人 辰一 左 二月 吉享	豊丁右 島卯門 郡V左 村廿七 敬白 日 武年 八助	世安右 樂奉 也供 施養 主庚 申二	講供 衆養 白台 当右 安奉 樂造 種立 因念 也仏	八貞大 女月念 廿仏 四講 日結 同衆 行一 四左 十口	願貞V 主享三 口二月 山閑丑 閑唱九 月一 九日 九左 口丁 巳
郎長道 太引	子育			子育			
よ跡版造 るを立 。た下 死ず谷 者ね浅 て草は 供『』 養に史新	他旧 に村 地道 蔵像分 二岐 体点		阿A 弥15 陀と 道同 沿位 置。 六	塔に文化代干甲養る現 。勇編財は移州のと地 地『』動街た、説 蔵由仏谷造よ 。金の立り立 申他石文年若。供よ		堂八八 を幡幡 管理。社 が沿 地い 蔵。	地に 蔵丸 彫合 掌か 坐七 像他七

42	41	40	39	38	37	36	
二目 黒 七 区 駒 場	泉沢板 寺三橋 地七区 蔵・小 堂・豆	寺八寺杉 南並 四・三 長、高 仙五円	四谷杉 南並 一 阿 三佐	二中 野 四 区 野 方	五練 馬 二 区 桜 台	九鴨豊 二島 三 三 、 巢	
一 六 九 二	一 六 九 一	一 六 九 一	一 六 九 一	一 六 八 九	一 六 八 九	一 六 八 九 ?	
錫舟 杖・形 宝立 珠像・	を両丸 持手彫 つで立 宝像・ 珠・	錫舟 杖・形 宝立 珠像・	錫舟 杖・形 宝立 珠像・	錫舟 杖・形 宝立 珠像・	錫舟 杖・形 宝立 珠像・	像・角 柱浮 錫杖 彫坐	
禄(右) 口壬 申十 二月 六日 元	四(台 月左) 二十 四日 辛未 歳	日(右 禄念 四年 辛十 一月 七)	里(右 ちよ 一奉 基造 二立 世念 安仏 講)	三(右 廿二 世安 樂也 立地 蔵)	る(右 逆奉 造立 地蔵)	人(右 新一 丁中 目台 世左 話)	
メ 切				南 向			
造疫 立病 と退 伝散 わの るた め	になは よ現を るた在 め、見し 『当た 石たし 仏ら石 銘山な	八野ど 。区も 大、長 和も仙 町と寺 二はな 、中れ	所読銘 あみ文 り。取は れ現年 な在造 いで立 箇は。庚	い。鎌倉 。現。倉 。内。街 。他。ル 。庚セ浴	二風 又。間 墓。地 崖。下。	他は供 に伝養 供説に 養塔よ 立横 る年死 。代者	わの るた め造 立と 伝

49	48	47	46	45	44	43	
上神練 久井馬 保五区 不二下 動・石	四東杉 三並 一區 十五成 田	二根世 木田 一谷 一區 五羽	二板 一橋 十九區 板橋	寺十町葛 七六飾 ・一區 光二東 ○金 増	四原世 一田 一谷 二區 三區 大	育町中 英二野 地一區 藏四區 堂二區 ・大和	
一 六 九 八	一 六 九 八	一 六 九 七	一 六 九 五	一 六 九 四	一 六 九 三	一 六 九 三	
錫舟 杖・形 宝立 珠像・	宝舟 珠形 立像・	錫舟 杖・形 宝立 珠像・	詳宝丸 細珠彫 不明な立 れ像ど・	錫舟 杖・形 宝立 珠像・	錫舟 杖・形 宝立 珠像・	合舟 掌形 立像・	
(衛 左門) 元 禄 十 一 八 戌 人 右	月 廿 一 日 八 戌 寅 年 十 元 行	十 五 日 八 丁 丑 年 十 月 元 等	念 乙 亥 四 月 口 日 八	小 講 中 台 左 元 禄 廻 八	道 行 二 百 三 十 五 町 人 村	月 十 日 本 願	日 元 禄 六 年 西 十 二 月 五
			わ身胸 り代突・				
一を格 ○確子 ○認越 メしか つに銘 トて銘 ルは文	像他馬 に橋 地街 蔵道 像沿 観い 音。		旧にと上板よ銘堂が神 板はす尾でる文内、社 橋記る「は。は安実境 街載が「台現「置はと 道が「左座石の境す 東な石河に仏た境外 面い仏越「説「め、 。「右明に、る易		トも ルと 南は の三 街道 面。メ 。	幡 通 り 沿 い。 置。 八	村上 飛目 黒村 地との 境。田

56	55	54	53	52	51	50	堂
四井練 台馬 六区 石 十神	一杉 並 五区 一天 沼	袋豊 三島 四区 七上 池	二尻世 ○二田 谷 二区 三 池	地北 蔵十 堂六 豊 下島 道四	四北 区 四三 志茂 二 町	四板 橋 二区 ○德 丸	
一 七 〇 六	一 七 〇 五	一 七 〇 四	一 七 〇 四	一 七 〇 三	一 七 〇 〇	一 七 〇 〇	
錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	立再 宝像 錫丸 杖彫	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	
十歳左供 二十養 人宝 月永 武口 列八 豊講 嶋中 郡六	武月寶薩 為右 二二 奉造 立地 藏 善		女ちおまお尻申三 まいめ村人 せおし(十) むお台一左 おすお正月 すな面吉 ておべ(日) かお口 清おわ口 信口	八月元所 十禄鈴 八十六 日同癸未 口(年十 台正)	立十世 之三安 夜八樂 庚申 庚申 V左 十一元 月禄	功三像 徳年施 敬八主 白庚申 V左 十月元 月禄	寅V天十一月廿九日
る道 べし		れあお が茶			子育		
二ふ 又。大 山道 沿い	申堂 二内 基。は 他に 庚	造立 怨靈 他に 供養 に伝 説		阿A 弥1 陀と 道同 沿位 置。 六		碑他 。に 庚申 塔・ 板	南の 十字 路。

64	63	62	61	60	59	58	57	
世田谷区粕	練馬区八関町	新宿区百人町	渋谷区幡ヶ	豊島区南長	杉並区阿佐谷	渋谷区幡ヶ	新宿区北新	
一七〇四	一七一?	一七一	一七一	一七一〇	一七一〇	一七〇八	一七〇八	
舟形立像	錫丸杖彫宝立珠像	錫丸杖彫宝立珠像	錫丸杖彫宝立珠像	錫丸杖彫宝立珠像	錫舟杖彫宝立珠像	錫丸杖彫宝立珠像	立再宝像錫丸杖彫	
(右) 奉造立供養庚	*銘文読み取れず	ケ下(段)正四谷市	郡道十(台右)正徳元卯年直	永越(台右)道長崎村施主	左月摩永基(右)奉供養地蔵	信善提(正)為去門	敬願主本橋平四郎	上石神井村平四郎沼邊
粕谷	直病かし	橋小滝	牛窪	子育		酒呑	咳淀止橋	
他に石仏四体	をに隣青梅街道沿い。に推よあり。測り造る立大日像	他に道標。	申塔。道供養碑・庚	二も一のは南長崎三	庚れ村二財は沿もよる宝	申た入又に由る。区立和泉川	る降の灰と噴火に	

70	69	68	67	66	65
江小九 戸川 区 北	世田 四谷 七区 砧	練馬区 水川 四三二 光伝寺	葛飾区 高砂 一六十三 二	世田谷区 南	杉並区 堀ノ
一七 一三	一七 一三	一七 一三	一七 一三	一七 一三	一七 一三
立角 像柱 合浮 掌彫	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	珠錫舟 杖形 立宝 像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像
寺月左願坂 廿成東正 十四正就東右 二人徳所秩奉 右岩癸同百供 面山己行箇養 下林七正所國	中供八山 廿養癸屋 三人之巳 所(天)正 台地正蔵 講講三西	十安立己 四樂地V台練 人所蔵四正馬 (月)正三武 左薩五徳角 講二八次島 中世奉癸口郡	Vみ仏 十ち口 月(奉納) 十日徳二左 八や申 壬王供 辰た養	V(台正) 九月正徳二 願主八壬 辰	多四 善十天 村左 薩人十 傳衛 村 敬月 衛門 願二白吉 門妻 主世日 口 同 安造 日 野祈地行壬三 喜与攸蔵八辰郎
		し川 流			申(左) 宝永口
と岩 の槻 交道と 差そ佐 ば。倉 道	り近 く。に 三 又路 あ	の白れ現 四子ど・光 つ道も、伝 辻。と、寺 村も在 道とはな	柱若も 北三千と 向猿移は 地蔵浮・旧 像彫他道 。道に面 標角で	塔い宮る村堀像に並た現 二か参がとノはよのめ 基?道、の内確る石、小 他の大境村認。仏銘松 に意宮でとき道石は店 庚味八は和るか塔、在 申合幡あ泉。ら杉の	村

74	73	72	71
豊袋 二島 区 五東 池	葛十町寺 飾六七 区 東 金○ 増	世馬十 田五 谷 区 五 下	豊一 島 区 千 三 早
一 七 一 四	一 七 一 四	一 七 一 四	一 七 一 四
立再 子像 ど も 錫丸 杖彫	錫丸 杖彫 珠立 像	持両丸 つ手彫 で立 珠像 を	錫丸 杖彫 宝立 珠像
(台) 小勝道左月位 合右(い九右) 村衛台者日元春 喜門)つき左六教 兵施町志こ酉禪 衛主上おれ天定 町んよニ 上じり正口	(右) 中四 月像 吉裏 日正 鮫徳 河四 橋牛 講年	(右) 武中奉十 羽二造月台小 豊世地大右川 島幸蔵吉正左 郡口尊日徳口 長(念台四 崎台仏正甲午 村左)講)午	岩田加小 付市迄岩 慈左式村 仁恩口里 寺是同老 道よ所口 同り 所右富草
子六池 育又袋			霜 田
ていヤ京浴も お位ン平いと り置パ成。は 像に一大現鎌 の祀角池在倉 実らの袋は古 見れ高キ帝道	の教トと た禪ルは め定街南 ニ道三 の面 供。○ 養春メ	かし三わ写つし尊の鍵 な真て五、地た付 何にいがおり二書よお、堂 かは(現、三)でるよ銘内 の「物ま」は。び文安 間蔵五ととは。び文安 違蔵、たとは。び文安 いな二合、な、但諸は置	のめき村II谷がA 祈、堂と長端ら3 り銘内の崎川、と 文安境村霜も同 には置。と田と位 由、女の鍵巢橋は置 る。女の鍵巢橋は置 性た付鴨辺旧な

79	78	77	76	75	
四二杉 一並 十区 六井 一草	一豊 一島 四区 一要 町	満二練 寺一馬 十区 五旭 能丘	一堂世 三田 一谷 二区 八区 一經	三宮中 一野 一區 二上 一鷺	
一 七 一 七	一 七 一 六	一 七 一 六	一 七 一 五	一 七 一 五	
錫光再 杖輪建 珠立 像丸 彫	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 珠立 像	錫舟 杖形 宝立 珠像	
本西 願V 主十 講月 中奉 敬造 白立 秋丁	村左 荒武 口蔵 同豐 行嶋 郡樂 長崎	左世拾利ハ は安六益口台 た楽人(ワ右) な(奉台口)享 志台新正)法保 道左造)地講界元 武蔵中平口 羽二二右	廿八休 四門 田(台 四乙心 長十(願谷右 日未(嶋六主領)当 V台次人)正松)原經国 曆右兵衛 発中 市堂荏 十正願 願 施男左家郡 一德主 願 施男左家郡 月五 主女右村世	主上V 鷺年左(右) 篠宮十(正)奉 氏村月吉(徳)念 敬日(五)仏 白台(八)講 願正(乙)未中	
				平病かれ子 癒気け願連	
蔵九一 像八 観再 音建 像六 他(明 に地治		村新り江れ現 と井古ど・ の村上田も能 境村板ニか寺 下村橋二つ又 練とにて在 馬中あはな		世は呼うと上測 安青ば一の鷺 楽)面れ体。宮 。金るも二村 剛が地又と (形蔵。中 二態とも村	測ら蔵も石の建六は 。造ののは祈。五不 立成。り銘年可 年立江とには能 代年戸もよ『像。 を代六とる女を一 推か地の台性再九

83	82	81	80
光四板 寺橋 十三区 ・板 東橋	三練 馬 四区 二 早 宮	北 七区 志 茂 三	一杉 五並 八区和 田
一 七 一 九	一 七 一 八	一 七 一 七	一 七 一 七
錫丸 杖彫 坐 像・	錫丸 杖彫 宝立 珠像・	錫丸 杖彫 宝立 珠像・	錫丸 杖彫 宝立 珠像・
靈二万佛 三 寿堂初光 質人船 名遍名妙部千号 冬 輝 (山台 敬誌一經法經住二敬 口享九從台東 白 号 蓮 陀万 (保恒慈正) 光開 台 願一 地華延羅遍 台主歲字現白 寺眼 下 主礼 蔵経命尼一左 沙次 相石豊師 * 營法号三蔵浄一無門己一侘天營 法観俗二世経土礼量観亥輪門生上丹	郎七日保地 (台右) 日 (三蔵 台戊尊) 願左成二 口 (台正) 主 芹講十安 台 澤中月樂正) 伝二十 二十五享奉	人口世月 (台正) 村安吉 台吉保 下 敬享保三 村列白 供奉天 講豊 中嶋 郡 四郡 九	月享 立等 (台右) 女地利益 (乃至浄 念蔵菩薩 正) 界 仏講中 (和田奉 丁西 V 台左) 村造平 年 十
安交追 全通分・	き夜 泣	木小 那	散病坂十 退貫 疫
板三尾ど現 橋丁追も・ 村目分、東 入交 〓 も光 口差 〓 現と寺 点 〓 板はな 〓 上橋平れ	他に庚申塔。	造像あり者 立 (〓 〓 〓 〓) 。一 〓 〓 〓 〓 九他養 三にの 五地伝 年蔵承	色る銘堂 村。文内 との和は安 境。田文置 。村献の とにた 雜よめ

89	88	87	86	85	84	
六井練 台馬 一区 石 十神	北 四区 浮 間 二	二足 立 十区 五梅 島	卷世 一田 四谷 一区 弦	多世 見田 七谷 七区 喜	城世 一田 六谷 区 成	
一 七 二 一	一 七 二 一	一 七 一 九	一 七 一 九	一 七 一 九	一 七 一 九	
錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	
生武月造正石講 州四立)神中(台 豊日地享井(左 嶋(蔵保村三下 郡(大六)十石 (菩丑三)一神 一江薩天人人井 蓮戸(奉台上 託九奉台上	月(台 口(正 願)享 主村保 中六 年 正	月中(右 廿(左 四)小 日)享 保門 四新 年田 九講	世(地(天 田(蔵(台 谷(大(牛 領)菩願)正 弦武薩主)月 村荏廿奉)延 原一造)四 郡人立)年	十享同見正亥 二保行村)V台 月四九武年右 八十奉羽十(享 日己四造多二保 亥軒立摩月四 V台尊郡日(八 年左)像喜喜)己	十同正(台 二行(野)右 月(台田)享 四(左)保 口)念四 三仏亥 十講口 人(中)台	る一名 が五俗 省二名 略名合 の記わ 載せが てあ約
安交 全通	向りい き・ぼり 北取	い槐 ぼ戸				
いふ じ 大 山 街 道 沿	入も 板口と 碑。は と現、 併置。庚 申村 塔北	ながい い、う 年伝隊 代承ゆ がもか 合あり わると	彰義隊 承ゆ かあり と	念他 仏に青 車。面 金剛像	銘文は 『地蔵 及み び取 諸れ	

96	95	94	93	92	91	90
八新 田宿 二区 西 十早	板橋 二区 成 増	北 区 上 十 条	二谷杉 申・北並 堂阿五区 佐阿 谷四佐	社六寺杉 ・北並 稻一区 荷二高 神一円	林世 三田 三谷 二区 若	円二杉 寺並 墓十区 地八和 東田
一 七 二 六	一 七 二 六	一 七 二 四	一 七 二 二	一 七 二 二 ?	一 七 二 一	一 七 二 一
錫舟 杖形 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫舟 杖形 立 像
本二人塚 誉月村 愚廿享 心四保 日十念 願一中 主丙廿 午四赤	武十辰 一V台 口月天正 吉石享 日橋保 台養九 右仏八 甲	ケ日八増 薩 谷 壬田 廿二右 村武寅奎 六世奉 一V右人(安造 多年衛左)樂立 麻十門)所地 郡月 願 蔵 阿十享主 講 佐五保 中菩	口女(右) 七念(佛) 八壬寅 V口童 子(左)	二田也講丑 十谷供V台 人領武養十正 女若蔵 月享 中林荏二日保 村原世念八 同郡安念八 行世樂仏辛	V(年左 十享淨 月保誉 十六信 日八士 辛靈 丑位	
育衛源 子兵	合橋姥 ケ 出					
る源当 目兵地 的衛を でを開 造供墾 立養し さすた	と板 の橋 交道 点と 王子 道		A 58 と 同 位 置。	の他と代承てが現 馬に石はな寺、 頭大「塔」して同 原に並杉。あ稲 家よの造つが社 造る石立たか社 立。仏年伝つた	材台 と像 とは 別 素	と在現 十はな・ 三和れ東 塚田ど円 に一も寺 あり。四墓 一も地

102	101	100	99	98	97
一杉 並 三 七 区 天 五 沼	寺二杉 前並 六区 観今 泉川	寺杉 四並 一 善 一 福	神練 井馬 三 九 上 石	三足 立 二 二 区 新 田	宿新 六宿 一 十 区 西 新
一 七 三 〇	一 七 二 九	一 七 二 九	一 七 二 八	一 七 二 七	一 七 二 七
錫舟 杖形 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	光再 子輪建 抱き 錫丸 杖彫
日庚攸薩 (戌(現右 台V左当 正歳二奉)十享世造 武月保所立 列二十願地 多十五成蔵 麻四八就菩	月十同蔵部遅 吉四行菩傳野 日八三薩左井 己十念工村 酉四仏門武 V人講内願 年女室主多 一保地渡郡	右此列己武願 門処多十月西台列主 三摩吉歳享郡野同 奇遅(地保遲甚十 進野台蔵十野右六 野井左)菩四井門人 田村)武薩八村	吉嶋養年口橋念 郡地申(役仏台願 上(蔵八台四講右主 石台菩月正)口七下 神左薩吉享石三石 井)日享保塚口井 村高武保十長本 講橋州奉三四本 中平豊供三	九二(台右鹿 願人(台正)浜 主奉造)立同 茂出木地行享 木立蔵四保 尊十	
		向江開 戸運	る道 べし		子成 育子
塔移天区 動沼画 等。一整 他四理 に三に 庚よよ 申りり	他所から移動か? 他に地蔵A106等	と二 関又 村。との境。草 村			版れ にた 由(る)現。地 説明

108	107	106	105	104	103	
町板 二橋 区 三東 ○新	寺杉 四並 区 善福	寺二杉 前並 六区 観今 泉川	四世 田 十五 区 一砧	二中 野 八区 白鷺	七豊 三島 区 駒込	
一 七 三 四	一 七 三 四	一 七 三 二	一 七 三 一	一 七 三 一	一 七 三 〇	
錫丸 杖彫 ？立 ・像 宝・	錫光再 杖輪建 宝立丸 珠像彫	錫舟 杖形 宝立像 珠像	合舟 掌形 立像	錫丸 杖彫 宝立像 珠像	二舟 地形 蔵陽 刻十	
え 道台 （右 圓 台 正） 八 享 保 わ 十 ご	主現念一享九 觀当仏月保月 譽兩供廿十再 緣養四九建 了為日入之治 増右甲寅台五 益村八V正） 願々夜十）年	為本月保道 十十十行 郎郎五七十為 右日入九二 衛壬子（安 門願子V左樂 主加年）享 藤越十	念亥（薩 仏V左）武奉 女十享保大 講一月十藏 中月吉六村 二十六祥八 十六日人辛東	麻是よ信中地 郡より女為蔵 上り高二大 鷺口戸十安薩 宮道七樂 村（七人念 武台信男講 州右）是男講	十 月台左 三 日 享 保 十 六 願 亥	平心郡 等天 同講中 為沼 有村 朝無 倉兩願 重縁主 工法 門界常
		向原 北				
入現 口・安 な養 れ院 と墓 銘地	村A一 と101九 関の〇二 村隣と11年 の上再 境井建 草。	と坂荻A もよ北102 にり四と 移庚一三 転申七置 塔地 と蔵西	観塔 音の公 園の橋 の側脇	四も のとは 二又。鷺 宮四一 四	園な井福享 よれ靈と保 りど園伝の 古いも付わ 。染近火 井二。の 靈又染追	

113	112	111	110	109	
杉並区今川	一東杉 四並 区 三 成 田	井練 町馬 七区 四石 神	院四中 野 区 実沼 相袋	四荒 川 区 荒 川	入安 口養 院 墓 地
一七三七	一七三七	一七三七	一七三六	一七三五	
舟形立像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	珠錫丸 杖彫 立像 宝	錫舟 杖形 宝立 珠像	珠
(右)念仏供養(左)	(右)方領(右)武多麻郡野 講中田 文二 四日 衛門	元月六文二八丁巳正 元渡邊九同門 勘四郎同門 元文二八丁巳正 月六文二八丁巳正 為尊像奉立天 武(羽)嶋郡下石樂也 村(左)清右衛門利左 衛橋安同清右衛門利 本次郎同利右衛門 清田(清)良右衛門 兵衛(清)良右衛門 田(清)良右衛門 米藏(清)良右衛門 田(清)良右衛門	(一)善正(左)繁昌薩 八口提正(左)因繁昌薩 摩郡沼袋(左)武州拾女 覺了信士矢嶋織 衛門	(右)寶池童女(左) 享保二十口 門道(右)講家小宮仁 吉(左)祥左八 内(左)念日講行拾八 九(左)寅天中上板橋 甲(左)佛講行十人 寅(左)天中上板橋 天(左)中上板橋 中(左)上板橋 上(左)板橋 板(左)橋 橋(左)中	
三谷	関口	子育			
桃井四十六より	と田 和端 田村(飛 び境地)	塔に十 。観字 音路 像角 地 庚 申他	の区ど現 道南、実 の蔵も相 辻。院と相 のは院 南練な 東馬れ		判移文 断さか れら た道 も筋 のよ とり

119	118	117	116	115	114		
三荒川区荒川	地龍光寺墓	杉並区和泉	々木町二元四代	田中野区四江古	五野区鷺宮	北三区志茂町	二寺前蔵堂 六・三・谷 観子泉
一七四〇	一七三九	一七三八	一七三八	一七三八	一七三八		
錫杖・彫坐像・宝珠	像した六地蔵	錫杖・彫坐像・宝珠	錫杖・彫坐像・宝珠	錫杖・彫坐像・宝珠	錫杖・彫坐像・宝珠	錫杖・彫坐像・宝珠	錫杖・彫坐像・宝珠
口同門兵師衛塚地 経行（衛證現蔵） 主台（左中上） 曆人（田人伝兵衛） 悉奉古治兵衛 及供来郎小衛 大養百左林吉 口之枚衛口導兵平等	（人）（左）（右） （六）（右）（念） （地）（念）（仏） （尊）（仏）（講） （供）（十）（一） （養）（七）（月） （未）		言寒古八 運念田月 志仏村元 寂念武元 浄仏州文 光中摩三 明（郡） 真（左）江午	宮屋六養大早 村（人）地野船 武（蔵清二屋） 州台尊右郎 多左衛門衛 麻（講門衛） 郡い中門施 上く三奉母 鷺さ十供	（牛）（右）（元） （台）（十）（文） （三）（八）（左） （元）（文） （三）（八） （元）（文）	中主一元 二本月文 十田朔二 八与日八 人七（丁） （郎）台巳 （正）年 連（）十 衆願十	
		田中		る道 べし	て子橋 育戸	子育	
	ノ松な現像に造 木ノれ・観よ立 一木と、龍る。年 （二）小学も寺他代 前校（と墓）にはは 。松は地蔵承		掘骨豊 さ及島 されび塚の る。経一 筒つが。人	五隣 四に 年庚 造）申 塔（一 四	旧奥州街道沿い。	と移 同転。 位。現 置。在 はA 102	

125	124	123	122	121	120	
鳥世 山田 六谷 区 十南	二原世 二一田 谷 三 九 松	二寺杉 南並 区 五高 三円	一中 野 区 野 方	三練 馬 区 羽 沢	二蔵世 一五田 谷 九 大	
一 七 四 二	一 七 四 二	一 七 四 一	一 七 四 一	一 七 四 一	一 七 四 〇	
上 舟半 形身 立破 像壊	宝丸 珠彫 立 像	錫角 杖柱 宝立 珠像	錫角 杖柱 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	
施主 村 講 中 吉 田	母願谷供八 主村養月台 領塔吉正 新松日寛 五原武寛 左村州奉保 衛台世唱二 門左田念壬 ケ仏戊	月酉門 提 廿V願 右 四講正主多 日中寛榎郡念 四保本高仏 十元忠円成 人八右寺就 十辛衛村菩	仏(V 講左年右 中三寛保 沼月保元 袋村願入 新主八 橋浄辛 念念酉	すくね左法正化 恵(界)村台 いお元願下 おぬ志二文主練馬 おぬ志や月六酉講 志郎ん吉酉 ふおお(前 じお台為台湿	口多(五 麻左右)人郡 元念大文 大蔵五供 村庚養 講申之 中天所	泰V者之若大若依 喜年也助男望者之 十力女雖 月元之口元 文乞成起文 願五度十就願年 主八令方仍望中 寛庚口法所雖当 誉申主界老口国
		てわと(観子 せ合観音育 音	辻			
	と松 の原 境。村 と和 泉 村	なら庚線一も い災申角と よ難(。三は うが青他環高 に)梅に状円 。つ街観七寺 て道音音・号 こか	残がも他 るあとに ?りは道 、別し 台のる 石の地べ のみ蔵II	丁 字 路 角。		

131	130	129	128	127	126	
一中野区新井	中野区大和 育町二丁目四二番地蔵堂	杉並区三方南 二丁目三番一	中野区野方 三丁目七	足立区本木 南町三丁目二	大田区石川 四丁目十三	七
一七四六	一七四六	一七四四	一七四四	一七四三	一七四三	
錫丸杖彫宝立珠像	錫丸杖彫宝立珠像	錫丸杖彫宝立珠像	錫丸杖彫宝立珠像	錫舟杖形宝立珠像	錫舟杖形宝立珠像	珠 錫杖・宝
あら右い村これ梅より院右江	西側門武養九 あ南北講主多十 がなさ東中摩奉五 やかぎ廿橋郡地延 ののた三本上蔵享 みみが人文沼菩念三 ちやた左袋薩仏丙 ミミ台衛村供寅	吉享木所主山主還 祥入長若秀覚 日甲兵者正夏鈴信 子衛(世譽壽信土工台親 季台話覺尼法門正提 一)役尼法門正提 月延鈴當願法地	衛主養甲正三 門子(月台右) 沼南九(初右) 袋無月台初寶永八 村地吉左(文口) 矢蔵日延(口) 島尊奉享(口) 右願供元台屋	三亥森(右奉造立地蔵尊 十下(左)月吉日講中 人十(左)月吉日講中	(右)寒念仏供養塔	(台左)同平口
て子育病	祈病育 願氣英		かがけん	蛇		
村新と井の村境と上風高土田	とがい八らが石銘数A 合幡ず現があを文の29 不わ神在あを文刻献 明せ社管はる見とんで とをに理見とんで のしもす当すだ左 こた問るたる台記複	あも地 りう蔵 一堂 体の 地中 蔵に 像は	病二る他村新 と十べにと井 関三を庚の村 連)夜兼申境と 。塔ね塔二沼 (る)道又 疫・し	めれ三蔵他 ずる一像に が年あも 銘造りう 文立、一 はと一体 読さ八地		

136	135	134	133	132	
三杉 一並 八区 一和 三泉	口板 二橋 一十 一大 一谷	二豊 一島 三〇 一高 一松	十沢世 一田 一谷 三〇 一北	四々世 一力田 二七 一谷 一十 一十等	
一 七 四 九	一 七 四 八	一 七 四 七	一 七 四 六	一 七 四 六	
合丸 掌彫 坐 像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	像角 柱浮 合掌 彫坐	
巳 V台 年正 願寬 主延 浄二 秀八 信己	兵駒十清日造正上 衛込二左(立)板台 肴人衛台供延橋右 町(門)左養享大武 台願二辰口谷州 石裏庚主月年村(島 工江講大吉祥奉台郡	年(中 口台二台 左世)右 為口(衛 延安樂台正) 享四丁三 卯人講	小飯渡薩V娘母 坂田部納奉安野助 六甚市延延野助 右郎十命享五左右 衛兵一月藏八衛衛 内門衛吉大丙門門奉 娘内日善寅願	月延左成々渡 吉享影就力し右 祥三向所村(右) 日入寺本講大 丙中願中荏山 寅稻主(原道 V毛(諸郡二 年江左)願等子	小野吉延善五三 三村日享薩拾丁 郎打三為五道 越武八善人(人 州丙提奉台 願多寅也造正) 主麻V台立講 保郡十左)地講 坂中月)蔵中
		子育		癒氣 平	
ど現 、 も龍 と光 は寺 和な 泉れ	塔道 向 か い に 庚 申	八も 一と 二。は 高松 二一 三		り記 。稿 』に 記 述 あ	

143	142	141	140	139	138	137	
練馬区大泉	杉並区成田	中野区白鷺	中野区白鷺	世田谷区弦巻	江東区東砂	中野区沼袋	龍光寺
一七五三	一七五三	一七五三	一七五二	一七五一	一七五〇	一七五〇	
丸彫立像	錫舟杖形立像	錫舟杖形立像	錫丸杖彫立像	錫丸杖彫立像	立再建像・錫舟杖形	錫舟杖形立像	
(台右)武羽豊嶋部	(右)念仏講中拾六	宝曆三癸酉三月廿五日 宮村武施多麻郡下鷺吉 立地世安樂所敬白講造	曆二願主大野久兵衛 日正願主大野久兵衛 善念正願主大野久兵衛	武州荏原郡世田谷 女中甘奉造地蔵大 廿四日(辛未年)願正月 寛延八良兵衛(台右)	(台裏)青山若松町 石屋八良兵衛(台右)	左衛門主八坂十島甚五 養所西国坂八所力 所西国坂八所力 祥日奉造地蔵尊 寛延三庚午十月廿六	日灵位十一月廿六
					北育向	育英	
現・観音像に蔵像	成宗境村と馬田橋端	や像り病に利益。塔明治の頃、	細不上明。宮在。詳	現・福蔵院門前	の造立年代は堂内	いかつては旧道沿	近松原七村との泉境付と

147	146	145	144	
草杉 三並 一五 一八 一八 井	用世 賀田 六谷 一四 区上	町洪 五谷 一 二区 猿 楽	三原世 二田 一 四区 一 十松	町六 一 二 四
一 七 五 八	一 七 五 六	五？ 三 一 七	一 七 五 三	
合角 掌柱 駒 形	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫杖 宝珠
時 劍寶 外曆 口八 忍竜 禪寅 定八 門塔 （月 正日 皆	はね おつ わお げん おん よお うさ んお みん	左V兵 衛年衛 海門 法十 師五 良吉 日八 右日 衛門 七子 良け ひり	そ（台 背）お すき おん おき おひ り	士支 田村 治講 中廿 口人
像二他 地基に 蔵。石 がさ橋 堂ら供 内に養 に木塔		合但三曆 わし以三 ない、前 乙。と〓 一判一か と断七ら は。五宝		田白れ に子ど あり。川 。畔、 も 土と 支は

151	150	149	148
世田谷区岡	杉並区今川	世田谷区上	中野区鷺宮
一七六三	一七六二	一七五九	一七五九
丸彫立像	再建宝珠立像	錫丸杖彫立像	錫丸杖彫立像
(台裏) 講中十四人	郎志左塔吉正平村郎年(満女卯(三正衛野巳(台右)がた信そ奉大郡十(主山面 吉村)倉保行日寶志五保起月右)竿施善V台界)門嶋願V(台右)あ人士の造野上月台禪信了下 鈴五坂者日曆村左郎坂人吉明)木郎源本十次丙衛(五錠建十)村工禪國年(衛)村門(供十)太台養月台郎志太之二)娘主提年(左)靈北庄右衛木彦)右廿妙九仏女中(彦)衛九保八講中(彦)門日信己中台右日辛	がた信そ奉大郡十(主山面 あ人士の造野上月台禪信了下 る名・他立弥鷺吉(正)心男空為菩提(左) が六口、地三宮日宝曆九己 読み取れず年いは	がた信そ奉大郡十(主山面 あ人士の造野上月台禪信了下 る名・他立弥鷺吉(正)心男空為菩提(左) が六口、地三宮日宝曆九己 読み取れず年いは
	他A 所101 よ等 りと 移同 転位 か置 ？		子育 確安 認置 でき ずさ れる が

156	155	154	153	152	
五根世 木田 二谷 一區 九羽	九二葛 飾區奧 三二一 十戸	六練 馬區 十七 桜台	根板 四橋 一區 小茂	育町中 英二野 地一區 藏四二大 堂二和	本 三 一 十八
一 七 六 九	一 七 六 九	一 七 六 九	一 七 六 八	一 七 六 四	
錫丸 杖彫 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫丸 杖彫 坐 像	合角 掌柱 坐 像	錫 杖 宝 珠
講十 中月 （右） 台羽 正根 口村 保念 十仙年	願六清 主己明 淨年三 心十界 月万 日吉 和月養六	四六馬 日年願 八主利 乙貞 丑（三 八）拾 月明武 廿和人練	願七諦取 主月院正 命吉善覺 祥口（若 月下若 成三台不 佛界正命 萬）者 施靈円不 我濟言信	日四卯其 右八兵廿 利甲衛三 井申（人 道V左） 天（願橋 二宝主講 月曆橋中 吉十本	岡多大日 本麻菩 村郡薩 （正年） 世台奉 田左口 谷領武 弼藏吉
と世 代田 田谷 村の 飛境 び地	入 定塚。	民家 脇。		A 28と 同位置。	

162	161	160	159	158	157
杉並区永福	橋板二橋二区上板	院五板一橋五区三赤畝塚	沢板三橋一十区二小豆	一練一馬七区谷原	蔵内杉堂堀二並内ノ八堀地十ノ
一七七七	一七七七	一七七六	一七七五	一七七五	一七七三
丸彫立像	錫舟杖形宝立珠像	錫舟杖形宝立珠像	錫丸杖彫宝立珠像	錫丸杖彫宝立珠像	錫丸杖彫宝立珠像
(台上段右)右大山	(中右)正(右)宝上板橋栗原講 成(正)就(天)下市良平五穀門 十(口)安(永)左(六)歳(西)口 口(言)月(四)百(万)遍(供)養(念)口	施(丙)主(へ)講(中)盤(珠)安(禪)定(門)か の(申)講(中)月(吉)祥(日)願(主)年 吉(左)申(工)十(門)月(吉)祥(日)願(主)年	仏(台)正(二)安(四)吉(左)未(念)典 ん(台)正(二)安(四)吉(左)未(念)典 仏(台)正(二)安(四)吉(左)未(念)典	道(台)右(里)大(山)道(あ)な(し)吉(村)十(武)口(兵)ど 立(台)右(里)大(山)道(あ)な(し)吉(村)十(武)口(兵)ど 中(台)右(里)大(山)道(あ)な(し)吉(村)十(武)口(兵)ど 人(台)右(里)大(山)道(あ)な(し)吉(村)十(武)口(兵)ど 州(台)右(里)大(山)道(あ)な(し)吉(村)十(武)口(兵)ど 塚(台)右(里)大(山)道(あ)な(し)吉(村)十(武)口(兵)ど 衛(台)右(里)大(山)道(あ)な(し)吉(村)十(武)口(兵)ど 道(台)右(里)大(山)道(あ)な(し)吉(村)十(武)口(兵)ど	当(台)左(み)ぎ(井)上(口)左(本)大(安)月 回(台)左(み)ぎ(井)上(口)左(本)大(安)月 乘(台)左(み)ぎ(井)上(口)左(本)大(安)月 武(台)左(み)ぎ(井)上(口)左(本)大(安)月 永(台)左(み)ぎ(井)上(口)左(本)大(安)月 四(台)左(み)ぎ(井)上(口)左(本)大(安)月 善(台)左(み)ぎ(井)上(口)左(本)大(安)月
			下坂の		
現在 は 墓 地 門 前	行者の霊を慰め川を越す た道の沿い。元は慰め川を越す た道の沿い。元は慰め川を越す	仏の内に銘文は『石に』 の内に銘文は『石に』 の内に銘文は『石に』	現(地)三(畝)院(墓) 境(村)山(蓮)道(沼)沿(村)と(志)	戸(ふ)道(じ)と(大)山(岐)点(橋)	堀(村)内(境)と(一)和(八)田 に(六)と(ノ)年(再)建(等)他(八)田 に(六)と(ノ)年(再)建(等)他(八)田

165	164	163	
院四板 門四橋 前・区 専仲 称町	橋板 二橋 一 二区 上 板	川世 台田 二谷 三区 玉	一 墓 地二 門三 前 六
一 七 七 九	一 七 七 八	一 七 七 七	
錫丸 杖・彫 宝立 珠像・	合舟 掌形 立 像・	錫丸 杖・彫 宝立 珠像・	錫 杖・ 宝 珠
嶋祥入安口五 郡日三永人台 下(界八高右) 板台万亥橋願 橋左靈口主庚 山(為(山申講 中武七法台本中 村州月界正)口拾 己豊吉施)	白石衛本上(祥口橋 信再口日(戈 川五板台日享長清士興曆左)右 文小兵場左五左井之十同泰V天 四宮衛之武造辰門右村施辰話平年下 郎源栗州立天(衛伝主十(二同安 講衛橋村豊地四台門右月吉右)講七 中門伝島蔵月正衛秋吉右)祥中八 敬兵口郡尊吉)石門円日)	日八万仏(い工井主(六上道 丁靈講台の門吉台泰丁段左 酉(中)頭(兵安上平西正)ほり V台(用□台衛藤段十天)の 天左台賀左下定左)月念下 十(正)江段大兵)当吉仏内 一安)戸正場衛)村祥講安(道 月永法女道)兵)村祥講安(道 吉六界念)右右石願日中永台	
の座点子はな現 。(易旧れ・ に現道川ど専 あ・と越も称 つ大の街、院 た山分道も門 も銀岐とと前	も台 とと 別像 物か はは もも とと	と用 の賀 境。村 と瀬 田 村	他所道な 所でのれ よは交ど りな差も 移いす、 動のる旧 かで、場街 ?

171	170	169	168	167	166
一板 橋 四区 中 台	練馬 一區 北 町	杉並 北區 阿佐 二	世田 谷二 區一 代	世田 谷二 區 二 桜	練馬 一區 八 谷 原
一 七 八 四	一 七 八 四	一 七 八 二	一 七 八 一	一 七 八 〇	一 七 七 九
宝笠丸 珠・彫 錫立 杖像	錫丸 杖・彫 宝立 珠像	立再 宝像 珠・ 錫丸 杖彫	錫舟 杖・形 宝立 珠像	錫舟 杖・形 宝立 珠像	錫舟 杖・形 宝立 珠像
辰町 年（台 台右） 講正） 中） 九天 十明 四道 人甲	世明久地廿下 安四右蔵五練 樂年衛尊（馬 也甲門（願） 九辰（願） 月歲台主奉 吉為）内立 二天田	九母左薩奉天向 月（）造明念 上嘉願十立二仏 浣永主月供人講 再四吉養壬中佐 建辛亥野日蔵（ 歲又）大年正） 七台菩	口十講（右） 治月（左）光 衛門（天）明 母（台）真 元（正）辛 願丑中	谷武女主七 新羽念（月 町荏仏口吉左 原講立日（安 郡中（蔵台永 世台善正）九 田左薩）子 ケ）願年	下亥 念 人 名 子 供 中 * 以
笠 懸	子安棚 育樂橋				
二 又。	沿二 い。又。 旧 田 柄 川	再るよ阿在現 建。り佐な・ 一移ケれ世 八転谷ど尊 五と一も院 一さ七、墓 年れ〇旧地		弦世 卷田 村谷 との新 境町 。村 と	横 山 氏 宅 東 側。

175	174	173	172
四江 五東 区 南 砂	宮中 二野 十区 上 鷺	町練 二馬 五区 九大 泉	烏世 山田 三谷 八区 北
頃一 七 九 一	一 七 九 一	一 七 八 八	一 七 八 四
錫丸 杖・彫 宝立 珠像	錫丸本 杖・彫体 宝立再 珠像建	錫舟 杖・形 宝立 珠像	錫丸 杖・彫 宝立 珠像
V (願地仏口 台主蔵講(台 左)早尊中台右 寛船為廿(正) 政久世人鷺月 三八衛樂奉村寶 亥門立念輪	(台右)十 月宮口 寶村寶 念輪	新(右) 八拾座 八郡奉 願申人上造 主V(白立 年左子地 江平)村蔵尊 門月明講	(台左) おちよ おきよ おお七
全通は現子延 ・安交在育命 受	木つ げの	橋別 莊	
の造 説立 明年 版代 には よる堂 。横	材。と 像とは 別素	傍馬一 編の部、 『石銘文は で造物は 補足。』 路練	

181	180	179	178	177	176
二学練 園馬 町区 八大 泉	三中 野区 二六 江五 原	四台練 馬区 光二 伝四 寺川	不豊 動島 堂九 前二 崎	町中 野区 四三 弥生	一井練 台馬 八区 石 二神
一 七 九 七	一 七 九 七	一 七 九 六	一 七 九 六	一 七 九 六	一 七 九 四
錫舟 杖形 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像	錫丸 杖形 宝立 珠像	錫舟 杖形 宝立 珠像
(V左年右) 二寛政九年八月丁巳 癌腫十八郎講工中巳	光等四修 明利忍行 真益法仏 言証界子 男妙諸無 女果衆障 講(台生難 中正)平(左吉日)	寛政講 八年十 月十五 日	門(念台 台仏正) 供願主 八月金 吉日右 衛衛天	がし月下 やき(右 本台正) 郷下寛 村正)八 左右年 はぞ辰 たう八台	(右) 龍世大 舎安光 甲寅處 寅三(左 月)吉 祥政就 留
	祈疫 願病	子育		子向子川 育台育島	る道格 べし 驗 合
治の三 以一体 降体あ 造(残る 立)り地 。は蔵 明像	田江 新古 田田 との村 境と 。江 古	道現れ現 沿ど光 い羽も 。沢、伝 付も寺 のと在 旧はな	年像との 代とす に台る ずと承 れ。は 造り 立。材	不金 動剛 の堂前 傍の職 江戸と 。路標 。余り 。路標 。余り 。路標	田雑 との村 の境か ？本 郷新

188	187	186	185	184	183	182
二草杉 二並 一區 三下 三井	九神練 井馬 二區 一上 二石	一沢世 ・三田 森一谷 巖二区 寺七代	町板 五橋 四区 大山	島墨 三田 一區 二東 向	二用世 三賀田 五谷 一區 七上	二中 一野 四區 八白 鷺
一 八 一 二	一 八 〇 八	一 八 〇 五	〇、一 一八 八〇 三四	八、一 一八 八〇 一四	一 八 〇 二	一 八 〇 一
錫光再 杖輪建 宝立 珠像 彫	珠錫舟 ?杖形 立 宝像	錫舟 杖形 宝立 珠像	立再 像建 合掌 彫	明内子 ・育 像地 容藏 不堂	錫丸 杖彫 宝立 珠像	坐角 宝像柱 珠 錫光 杖輪
附月 合五 中日 再 石建 工正 伊当 藤村 寅	願本旦文音 橋造化三 治之五 郎台辰 勘右正 兵工 衛門 俗名 右吉	二助藤權 八左左 乙木エ 丑村門 講中 七文 化平	(左)台(右) (正)願 主たわ がし やま 道道		年左界(用)万台賀 十享靈(正) 一和左右 月二大府 十六八山 日壬道道 戊(台三 V台三中	半寺正酉(門 兵上道)台 衛口是右(右) 廿よ東九 七り高月 十野吉 願念山日 主講長(八 篠中命台辛
る道 べし			福大 山	子 育		
所沢道 沿い。	花や 崗や 岩白 かっ ?ぽ い ので	前ど現 は、森 路道標 傍か?の 寺な で、れ	に造一 由立九 る。年五 。年代一 は年再 伝建。 説。	に造 由立 る。年 代は 伝説		四も のとは 二又。鷺 宮四 一四

192	191	190	189
三杉 八並 一三 九区和泉	町洪 三谷 〇区 猿 楽	北練 二馬 一五 区中 村	山一板 不橋 動九区 協成赤 会田塚
一 八 二 三	一 八 一 八	一 八 一 六	一 八 一 二
角柱 文字	たをも丸 か持と彫 つは坐 て錫像 い杖・	宝像丸 珠・彫 錫光 杖輪 ・立	錫丸 杖・彫 宝立 珠像・
村二 一月右 一本南吉 松無日政 世蔵正六 話大癸 人菩和未 八薩泉年	如左弥正天 水陀台 童淨仏右七右 子迎大月 引左山十文 願説天道五政 主信寺無戊 念士台阿台寅	み羽半十の ね豊右八う り嶋工人ち ま郡門道 中願念 村台主 左西講 か武貝中り日文	主左年 中世月 田話口 人念 梶口九 山壬 施台口
と泉ど現 松二も・ 原七も光 村和と寺 の泉はな 境村和れ	音地黒下 像蔵村洪 一像と谷 体。二境の村 体・と ・他上 観に目	西み台つ 貝合はた塚 氏わ移も二像 宅せの十はな 門た動。三も田 前もの但三も山 。の際しにとど不 。の。動。あは動	工建化草摩 立九村郡台 八下北さ台南が台 四壬台念段志 谷申下仏正ん道 忍V段講武う台 町年裏中州や上西 十州や上西ち上東 石月文井多道段との段ぞ

主な参考文献
 王子町『王子町誌』(一九二八年)
 『新編武蔵風土記稿』*大日本地誌大系版を使用。

	197	196	195	194	193
	五中 一野 二区 一本 九町	練馬区 旭丘	沼並区 本天	畑立区 南花	三橋区 西台
	一八六五	一八六三	一八三二	一四八三〇	一八二四?
	丸彫杖立像	合舟形立像	錫舟杖立像	角柱文字	杖・宝珠は錫
	三士廿女 日文一 久日慶 三応 年臨元 十阿年 一良十 月浄二 十信月	三(右) 癸亥為 五年五 月(左) 文久	口仏月八薩 講(丁尊) 源中酉像 左四正)奉 衛門十本(左) 三願月天 口主吉保 敬念祥二善	口地右野衛口念州不善初天 年蔵(四)月廿四日(左) 大菩薩天保口 長兵衛左衛門 兵衛小原権 衛中(西)臺村左 臺臺(教) 徳武間蔵	十吉馬之助久蔵 天(右)奉地藏 八(地)蔵 薩(慈)正 薩(善)地 蔵(善)地 蔵(善)地 蔵(善)地 蔵(善)地
	子秋育津		稻積		
模つ道し台る墓て風他に 造た標図右が地お車に 地銘の法側当考、捧が 蔵職が面該え秋げあり に文能あにの津らり、 よは隣もり手像ら津らり、 のあ、差のれ家れ、			改保ので並た村天 め伝補のめと沼 たを説つ石の村 にた仏銘境と 天よがと文下 保り、石は破井 「一当塔」損 に享地」杉の草		下るにずす一か「付 。一。る八ら石近 京八甲が一文仏 徳二申確五化で 観四か認(十)は 音とらで作(五)銘 堂す仮きと 文

板橋区教育委員会社会教育課文化財係『石仏』（一九九五年 板橋区教育委員会）
 東京都渋谷区教育委員会編『渋谷区の文化財 石仏・金石文編』（一九七七年）
 杉並区教育委員会『杉並の石仏と石塔』（一九九一年）
 東京都世田谷区教育委員会『地蔵および諸尊』（一九八五年）
 豊島区郷土資料館『女性の祈り』（一九九三年 豊島区教育委員会）
 練馬区郷土資料室『練馬の石造物―路傍編（一）』（一九九一年）
 東京都葛飾区教育委員会『東京都区北區庚申信仰関係石造物調査報告書』（一九九六年）
 東京都台東区教育委員会『葛飾区石仏調査報告』（一九八二年）
 東京都台東区『下谷浅草 史跡をたづねて』（一九八四年）
 大田区教育委員会『大田区の石造物』（二〇〇一年）
 新宿区教育委員会『新宿区の文化財（2） 石仏と石造品』（一九八一年）
 品川区教育委員会『品川区史料（二）』（一九八三年）
 品川区教育委員会『しながわの史跡めぐり』（一九八八年）
 江東区『古老が語る江東区の祭りと縁日』（一九八七年）
 小島惟孝『墨田区の史跡散歩』（一九九三年 学生社）
 高田隆成『荒川区の史跡散歩』（一九七八年 学生社）
 東京都中野区教育委員会『路傍の石仏をたづねて』（一九七六年）
 中野区教育委員会『路傍の石仏をたづねて』（一九七六年）

第二節 京都―旧平安京城を中心に

京都の街を歩いていると、街角のところどころに地蔵像がお堂に祀ってあるのを頻繁に見付ける。これは各町^{ちやう}が主に地蔵盆のために祀ってあるものである。地蔵盆の為と云えるのは、地蔵盆以外には地蔵に対して行事を行わないからである。また、町によっては、普段は地蔵像を寺に預け、地蔵盆の際にのみ表に出す、もしくは地蔵盆の時期のみ地蔵像をレンタルすることからも、町が地蔵像を祀っている目的が類推できる。

以下の分析は、私が、二〇一〇年に下京区を、二〇一一年に中京区を調査したものを基にしている。

八月下旬の土曜日もしくは日曜日、京都の街を歩くと、あちらこちらで地蔵盆が行われている。もともとは八月二三・二四日だったが、サラリーマンが準備に困るということで、一九八〇年代以降、八月下旬に移す町会が増えた³。京都に於いて、路傍の地蔵像はどのような目的で祀られるようになったのだろうか？

まず確認すべきは、地蔵盆は江戸時代に於いては地蔵祭（もしくは地蔵会）と呼ばれていたことである。明治政府の因習打破政策によって、路傍の地蔵像は破棄され、地蔵祭は一旦廃絶した。明治二〇年代、盂蘭盆と足並みを揃えて復活する際、地蔵盆と呼ばれるようになった。

地蔵祭の文献初見は、鈴木正三『反故集』である。

一、京中辻々の地蔵祭、去年七月より童部共、見事に致し候。此五月にも盆を待兼て、辻々にて祭を見事に致候。（日本古典文学

大系『仮名法語集』三二五頁）

正三の没年は、一六五五年なので、「去年」はこれ以前である。これ以外に「去年」の手掛かりがないかというところではない。村上紀夫は、当該の文章の前後に着目した。まず、直前の文章を引用する。

一、太神宮へ諸国より童部共夥く抜参致候。

所謂「抜け参り」を記している。伊勢神宮への抜け参りは、一六三八年と一六五〇年に起きている⁴。当該の文章の後の文章を引用する。

三郎九郎思立候て、去年より十王建立致し、

「三郎九郎」は弟・鈴木重成⁵を指す。鈴木重成が、一六三八年に十王堂を建立していることから、村上紀夫は、「去年」を一六三七年に想定した⁷。『反故集』は言わば正三のメモ書きを集めたもので、当該箇所の前後より年代を推定するのはやや躊躇するところではあるが、まずは傾聴すべき見解と云える。そこから村上は、一六三七年に地蔵祭が行われた理由を、寛永飢饉前段階⁸による災害とこれを鎮めるための無縁仏供養とする。村上は災害とするが疫病の意であろう。

これに続くのが、一六六二年刊、中川喜雲『案内者』である。

同（註一七月）廿四日・・・地蔵祭 此日六地藏をめぐりおがむ。一に御菩薩池^{みざろ}の地藏、二に山科の地藏、三に狼谷の地藏、四に鳥羽の地藏、五に桂の地藏、六番は常磐の地藏。・・・今日は地藏の御縁日にて、六地藏の外にも供物灯明参詣あり。（句読点を補う。『近世文学資料類従・仮名草子編9』二一〇～二一一頁。「狼谷」は「大亀谷」の意で、大善寺を祀られる伏見地藏を指す。）

これを見ると、地藏祭とは、六地藏めぐり十各地の地藏祭の二つを含んでいることが分かる。なお、六地藏めぐりは、中世にも存した（第二部第九章第一節前述）が、場所が変わっている。これは中世の六地藏めぐりが戦国の動乱で廃絶、江戸時代になって、浄土宗の僧が復活させたためである¹⁰。（六ヶ所のうち、三ヶ所が浄土宗寺院。また、浄土宗の大善寺の地藏像から他の五体の地藏像が派生したとされる。後述）

問題は、江戸時代の六地藏めぐりがいつから始まったかということである。真鍋広済は、一六四三年『福齋物語』に六地藏のまとまりが見られないことから、江戸時代の六地藏めぐりの初出を、一六六二年『案内者』とする。これに対し、大東俊一は、『福齋物語』に錯誤があり、六地藏めぐりの初出を一六四三年とする¹¹。まずは、『福齋物語』を引用する。

御菩薩池地藏、山科六角地藏、伏見油掛地藏、桂川島地藏、常磐要地藏、鳥羽地藏、壬生地蔵、無苦花地藏、子安地藏、腹帯地藏、目疾地藏、大江山地蔵、矢田地蔵（『徳川文藝類従第二』九〇頁を京都大学付属図書館所蔵本により一部改める）

問題は、「伏見油掛地藏」である。もともと『徳川文藝類従第二』では「福見」となっていたため、真鍋は、六地藏のまとまりが無いとした。これをまず大東は、京都大学付属図書館所蔵本より「伏見」に改めた。しかし、「伏見油掛」であれば、大善寺の伏見六地藏

とは異なる。大東は、作者の思い違いとする。大東も指摘するように『福斎物語』は小説であり、錯誤があってもおかしくはない。

これに続くのは、先に引用した一六六二年『案内者』であり、今日に続く、六地藏の組み合わせが明示されている。『案内者』の記述に従えば、地藏祭の本流は、六地藏めぐりであり、各地の地藏祭は付け足しということになる。一六六八年刊『山城国中浄家寺鑑』には以下のようにある。

毎年七月二十四日御菩薩池より参りはしめて終り常磐の里迄六ヶ所の地藏参り洛中洛外道俗男女袖をつらね踵をつゐて参詣せしむる事夥し。或は六斎念仏又は鐘鼓拍子木を打ちならし路次中念仏す。又下知するひとなしといへとも道あしき処には道を作り、橋なき所には橋をかけ、村々辻々に接待し、地藏会の殊勝なる事とも筆に記し難き者也。・・・七月には花洛辺鄙ともに親は子に是(註―地藏祭)を許し、群童には其所を行ぜしむ。(仏教大学所蔵本二二―二四丁)

一六七三年刊『山城四季物語』には以下のようにある。

其さとぎとには。詣人のため休所をとりまかなひ。施茶をなし。あるは童子の業として。道のはた辻々の石仏を。とりあつめて。地藏と名付。顔白く色どり。花を手折。供物をささげて。地藏祭をなすなり。(『近世文学資料類従 古板地誌編5』一五二頁)

『山城国中浄家寺鑑』・『山城四季物語』とも、六地藏めぐりを子どもが模倣する姿が描かれている。とすると、現在行われている、京都各町の地藏盆は六地藏めぐりの模倣と云える。この説を唱えるのが、例えば、山崎千恵子で以下のように述べている。

わたしは、もつと単純に子どもたちの「ごっこ遊び」が、現代に見られる地藏盆のはじまりではなかっただろうかと考えています。

(山崎千恵子「地藏盆あれこれ」(『子どもの文化』第三二巻第十号 二〇〇〇年)

日本古典文学大系『仮名法語集』に於ける『反故集』引用箇所「地藏祭」の注釈でも、「京都のものは洛外の六ヶ所に地藏尊をまつり毎年七月二十四日に供養したところから、この日市中の子供たちが辻毎の地藏尊をまつた行事」とする。しかし、村上紀夫に従えば、「辻々」の地藏祭は、一六三七年に行われており、六地藏めぐりの初出(一六四三年)より古い。六地藏めぐりと地藏祭との前後関係は、どう考えればよいのであろうか?

私は、『反故集』(一六三七年の記述)とこれに続く『案内者』(一六六二年刊)との二五年の隔絶に着目する。一六三七年に地藏祭

が始まり、定着したのであれば、二五年の間、記述が無いのは不可解である。一般に、こうした民間行事は記録に残りにくい、京都は記録が多い街である。着目しているのは、一六三八年は、待ち兼ねて早くも五月に地蔵祭を行ったという記述である。それだけ疫病が流行っていたと想定されるのである。則ち、一六三七〜三八年は、疫病が流行り、それを鎮めるために地蔵を祭ったということである。これに目を付けたのが浄土宗の僧であり（後述）、一六四〇年頃、大善寺を中心に六地藏めぐりを再編し、六〇年頃になると、『案内者』に記述される程、定着した。この六地藏めぐりの模倣として、子どもが地蔵祭を始め、少しずつ普及し、各町の行事として定着するようになった。現存する文献から導き出せる仮説は以上の通りである。

もう少し文献を引用して、地蔵祭の分析を続ける。というのもまだ、各町で地蔵祭が行われる時代にまで到っていないからである。

一六六五年刊『山城州宇治郡六地藏菩薩縁起』には以下のようにある。

後白河院の御治世、保元二年、寶祈長久聖壽萬歳國土安穩の御祈り、又は貴踐往来の輩、二世安樂の結縁のためとて、六躰の中一
刀三禮の尊容を此寺 註―大善寺におき、残り五躰を五ヶ所に分けらるる。所謂四の宮河原 六地藏の里 上鳥羽 御菩薩池 桂の里
常磐院 各王城の口六ヶ所也（古典文庫『地蔵靈驗記絵詞壺 一五九〜一六〇頁

後白河院云々は、史実でないにせよ、江戸時代の六地藏めぐりの対象とする各地蔵像が大善寺・浄土宗より分かれたものという伝承を記している。ゆえに真鍋は浄土宗の僧が中心になって、江戸時代の六地藏めぐりが形成されたとするのである。¹²

一六七六年序・黒川道祐『日次紀事』には以下のようにある。

洛下童児地蔵祭 〆洛下童児、各の香華を供え街衢の石地蔵に於いてこれを祭る。蓋し道饗祭の遺風か 〱（原漢文を書き下した。

〆〱は割註 『新修京都叢書 第4』三二二頁）

童子を担い手とする地蔵祭が常態化していたことが分かる。この史料から、地蔵祭の起源を道饗祭に想定する説があるが、古代の道饗祭が、中世・戦国期まで続いていた証拠は見当たらない。また、『日次紀事』の続きとして、以下のようにある。

姉小路地蔵祭り 〆昨日より姉小路東の洞院の西 地蔵弥陀の両像を家店に安置す。各々百万遍の數珠を転ず。明日に及ぶ。 〱前同三

一部の地藏祭りでは、地藏を店や家に安置していたこと、及び百万遍が唱えられていたことが分かる。

各町の花蔵像が常設として祀られるようになった経緯を示す史料を以下、挙げたい。

七月、両替通り竹屋町上る町西方寺町の角やしきに土蔵あり、其家の主人夢に或人来て曰、我は其方の土蔵の内にあり、早く我を出すべしと、翌日主人怪く土蔵を見るに、何の事なし、則土中を掘ること二尺余、石仏の花蔵の像あり、出して見れば背後に弘法大師の裂く、西方寺の字あり、此の町西方寺の旧地也、今は東野新地に移る。之より昔の西方寺の石仏なることを知る。此の石地藏を安置して、当年より花蔵祭を始む。(一七三〇年刊『月堂見聞集』、『続日本随筆大成 別巻 近世風俗見聞集4』一四一頁) まず確認すべきは、花蔵祭は、一斉に普及したのではなく、徐々に広まっていったことである。当該の町が始めたのは一七三〇年をさほど遡らない時期であろう。そして、花蔵(と云われる)像を祀り始めた原因を考察したい。京都の諸寺は、戦国の動乱によって、荒廃し、廃寺となったり、場所を移ることもあった。さらに一五六九年、織田信長が足利義昭の邸宅(所謂旧二条城)造営のために、石仏を供出させた。

建築用の石がなくなつたので、彼は多数の石像を取り壊すことを命じ、頸に縄をつけてそれを工事場に曳いた。みやこの住民は彼等の偶像に尊崇の念をいだいていたので、このことは彼等に驚愕と恐怖の念を起させた。かくて、これらの殿の一人はその部下を使って各寺院から毎日一定数の石を運んできた。・・・彼等は石の祭壇を破壊し、仏を粉ごなに砕いて地上に投げ倒し、これを手押し車に積んで運んできた。(ルイス・フロイス『日本史4』東洋文庫版一六〇頁)

なお、「二条城」と云われている通り、石垣が設置されており、石仏は石垣に使用された。この足利義昭邸宅は、一五八二年、本能寺の変により焼失し、その後、石垣の材料たる石仏は、荒廃した屋敷(旧二条城とは限らない)の掘を埋めることに使われた¹³⁾。このため、石仏が京都の街に拡散することになったのである。なお、『日本史』では、「仏を粉ごなに砕いて」とあるが、『仏教芸術』第一一五号の表紙に掲載される、旧二条城跡より発掘された石仏は、大きさは画一ながら、原型を留めている「章末写真一」。当時の石垣は、野面積みであるため、材料たる石仏は、大きさがある程度画一にすれば、原型のままで差し支えなかったのである。「写真一」掲載の仏像は、京都の町角で祀られる花蔵像と良く似ている「写真二」。なお、佐野精一は、京の町の石仏は、もともと彫りの浅い阿弥陀像で、

墓地に祀られたものであり、それが戦国の争乱によって、流出し、祀られるようになったので、目鼻を付けるために化粧をした¹⁴、という説を唱えている。旧二条城出土の石仏を見るに、首肯される見解である。

以上の事情から、江戸時代の京都では、辻に仏像がころがっていることもあった¹⁵、土中に埋もれていることもあったと考えられる¹⁶。まずは、辻に転がっている仏像が子どもによる地蔵祭の対象となり、その後、流浪の仏像を町で地蔵として祀るようになったと考えられる。というのも、京の各町で祀る地蔵像の形態が多種であるからである。前述の如く、京では町の地蔵像が明治期、一旦破棄されている。ゆえに江戸時代のままではないものも多いが、それにしても、地蔵像の形態は多種である。敢えて造立されたという伝承は管見の及ぶ限り見当たらない。

一七一三年序・其諺『滑稽雑談』には以下のようにある。

地蔵廻並祭・・・毎年今日、貴賤男女老少ともに地蔵を供養し、件の六所へ、昨廿三日夕より、終夜を経て巡参をなす。是を地蔵廻り或は地蔵祭と称す。童子の類は、道路の石像に、紅白の彩をなして、香花をそなへ、路傍において是をまつる。(国書刊行会 版第二卷四七頁)

一七一三年でも、六地蔵めぐりと各地の地蔵祭が一体的に捉えられていたことが分かる。また、依然、子どもが道の地蔵像を祀っていたことも分かる。町で地蔵祭を行っていたことは明示されていない。

一八〇二年刊・滝沢馬琴『鞆旅漫録』には以下のようにある。

七月廿二日より廿四日にいたり。京の町々地蔵祭りあり。一町一町家主年寄の家に幕を張り、地蔵菩薩を安置し、いろいろの備へ物をかざり、前には灯明挑灯を出し、家の前には手すりをつけ、仏像の前には通夜して酒もりあそべり・・・年中町内のいひあはせもこの日にするといふ・・・伏見辺大坂にいたりてまたこれにおなじ。(日本随筆大成版第一卷二三二～二三三頁)

『鞆旅漫録』では、各町の地蔵祭が盛んに行われていたことが記されている。今日、京都の地蔵盆では、この日に町内会総会を行う所があるが、このことが江戸時代にまで遡れる慣習であることが分かる。「酒もりあそべり」という表現から、江戸時代の地蔵祭が大人中心の祭だったとする説がある¹⁷が、今日の地蔵盆に於いて、子どもが簡易プール等で遊んでいる脇で、大人がビール片手に談笑して

いるのは、良くある光景である。また、未成年禁酒法以前に於いて、酒を飲むのは大人だけと断定するのは早計であろう¹⁸。今日の如く、子どもが遊び、大人も関与する祭であつたと解釈すべきだろう。

同じく滝沢馬琴『俳諧歳時記』（一八〇三年刊）には以下のようにある。

地蔵祭 廿四日 洛外六所の地蔵詣なり。……七月廿四日諸人六所に詣ず。これを地蔵祭といふ。洛下の児童も、又各香花を街衢の石地蔵に供じてこれを祭る。（句読点を補う。『近世後期歳時記本文集成並びに総合索引』八八〇〜八八一頁）

一八〇三年の段階でも、六地藏めぐりと各地の地蔵祭とが一体的行事として捉えられていたことが分かる。なお、増補版『俳諧歳時記』（一八五一年刊行）でも同様の記述がある。また、町が主体というよりも子どもが勝手に行う地蔵祭が依然として行われていたことも分かる。

以上、江戸時代の地蔵祭の史料を挙げてきた。各地の地蔵祭と六地藏めぐりとの前後関係は断言できないものの、各地の地蔵祭は、六地藏めぐりと一体的に行われていたことが分かる。

では、各町の地蔵祭は如何なる心意で行われていたのか。確認すべきは、各地の地蔵祭の源流と云える六地藏めぐりは、死者供養を目的に行われていたことである。このことは、江戸時代の六地藏めぐりに六斎念仏を伴っていたことから分かる（先に引用した『山城国中浄家寺鑑』）。また、六地藏は京都各六口にあり、それは外部から成仏していない怨霊が入ってこないようにしているためである（ゆえに六斎念仏が唱えられるのである）。従って、六地藏めぐりは、未だ成仏していない死者を供養することを目的としていたと考えられる。現在でも、六地藏会発行「京の六地藏めぐり」公式パンフレットでも、「新亡精霊の初盆には水塔場供養し、三年巡拝すれば六道の苦を免れる。……不運な因縁により、この夜に生れ出ることの出来なかつた水子の供養にお参りください」とある。二〇一〇年、私は京都新聞旅行センター主催の「京の六地藏めぐり」観光バスに乗ったが、隣の六〇代とおぼしき方から、「始めてですか？ どなたか亡くなりましたか」と話しかけられた。京都では、近親者が亡くなると、少なくとも成仏するまで（三年間）は六地藏めぐりを行う風習があるようである。

これをうつした、各町の地蔵祭も成仏していない死者を供養することを目的に行われたと想定できる。それは、数珠繰りを行って

ることから判明する。ちなみに数珠繰りは六斎念仏のうつしである。また、現在の地蔵盆に於いて、数珠繰りの際に、賽の河原地蔵和讃が唱えられる場合もある¹⁹。賽の河原地蔵和讃は、未だ成仏できない夭死者供養のために唱えられるのである。また、京都の地蔵盆に於いて、亡くなって一年立っていない死者（＝新仏）のために御詠歌が唱えられることもある²⁰。

もう一つ考えなければならぬのは、地蔵像の設置場所である。『見た京物語』（一七八一年刊）には以下のようにある。

町々の木戸際ごとに石地蔵を安置す。是愛宕の火ぶせなるべし。（『日本随筆大成8』十一頁）

これに従えば、地蔵像は町境に設置されたと云える。だとすれば、やはり京六口に祀られた各地蔵像を模したと云える。その心意は外部から疫病侵入を防ぐものだが、その奥には未だ成仏していない死者を供養する心意がある。

まとめると、現在、京都では各町に地蔵像が祀られ、八月下旬には地蔵盆が行われる。町の路傍に地蔵像が造立されるようになった心意は成仏していない死霊（＝怨霊）による疫病を防ぐためであった。なお、江戸時代に於いても、疫病は、怨霊が起こすものと信じられていた²¹ことを確認する。

最後に、現在、京都では路傍に祀られるのは、基本、地蔵とされることを確認する。一部の町では、八月下旬に大日盆が行われるが例外的である。現地調査では、地蔵を収める祠に付された、「卍」を「地蔵の意」とする聞き取りを得た。この要因として、中世京都では、死者供養を目的とした、六地藏めぐりが定着しており、これが江戸時代になって復活、普及したため、死者供養と云えば、地蔵となってしまうことが挙げられる。このため、町で祀る仏像は地蔵とされるのである。

「写真」 『仏教芸術 第一一五号』 表紙
No. Lange

「写真二」京都市北区柴野北花ノ坊町に祀る仏像。赤い前掛けをしているので、町では地蔵と見なしていると判断される。



1 この場合の「町」は現在の行政区域ではなく、十〜二〇軒程度の生活の単位である。現在、京都市の「町」の数は、正確には把握されていないが、約六三〇〇が確認される。田中志敬「京都の地域コミュニティと地域運営」（鯉坂学・小松秀雄編『京都の「まち」の社会学』二〇〇八年 世界思想社）

2 松崎憲三「廻り地蔵の研究」（『廻りのフォークロア』一九八五年 名著出版）。現在でも地蔵像を一時的に借りるといふ風習は残っ

- ている。京都市文化市民局「京の地蔵盆」(二〇一五年二月開催「お地蔵さまサミット」配付史料)
- 3 利光有紀「京都のお地蔵さま」(『季刊民族学』五三号 一九九〇年)・山崎千恵子「地蔵盆あれこれ」(『子どもの文化』第三二卷第一〇号 二〇〇〇年)。なお、現在、福井県小浜市でも地蔵盆を土・日に移す傾向が存する。近石哲「地蔵盆行事にみる地域の特徴」(『比較民俗研究』第二七号 二〇一二年)。
- 4 『武江年表』東洋文庫版上巻三七頁・五〇頁。
- 5 鈴木重成は、島原の乱後の天草地域の代官を務め、その死は、年貢減免を求めた自刃とされてきた。これに対し、近年、病死説が唱えられている。三浦雅彦「鈴木正三における伝記研究と批判」(『鈴木正三研究序説』二〇一三年 花書院)
- 6 神谷満雄『鈴木正三』(二〇〇一年 PHP) 三四五頁。神谷の論拠は、十王像の銘文である。当該の十王像は、現・愛知県豊田市足助町・十王寺在。
- 7 村上紀夫「近世都市京都の地蔵信仰」(二〇一五年二月二二日開催「お地蔵さまサミット」配付レジメ)。なお、村上レジメには、清水邦彦「京都の地蔵盆の歴史的考察」(『比較民俗研究』第二五号 二〇一三年)が参考文献に挙げられている。また、今回、註4・6は私が原典に当り、村上説を確認した。
- 8 寛永飢饉は、一六四二年に起こるが、一六三七年頃より前触れがあった。佐々木潤之助「寛永飢饉について」(『民衆史を学ぶということ』二〇〇六年 吉川弘文館 *初出は二〇〇〇年)。
- 9 村上「近世都市京都の地蔵信仰」前掲。
- 10 真鍋広済『地蔵菩薩の研究』(前掲) 四三頁。ちなみに、浜中寛純『京都「六地藏巡り」の栞』(一九三二年 竜門春秋会)によると、鳥羽と桂の地蔵像はもともと路傍にあったものを寺で祀るようになったとする(二八〜二九頁)。
- 11 大東俊一「京都の「六地藏めぐり」について」(『人間総合科学大学紀要』第二四号 二〇一三年)。
- 12 真鍋広済『地蔵菩薩の研究』(前掲) 四三頁。
- 13 森島康雄「平安京跡・旧二条城跡出土の石仏」(『史迹と美術』第六三卷第七号 一九九三年)。

14 佐野精一『京の石仏』（一九七八年 サンプライト出版）二二一～二三頁。

15 山岡元隣『百物語評判』（一六八六年刊、原型はその前に成立）には「今の世に、田舎も京も女童部の云ひならはし侍るは、道路に捨てたる石仏、さまざまの妖怪をなし、人を歎き、世を驚かすと云へり。つらつら按ずるに、中世のころ、なき人のしるしの石をたつとて、かならず仏体をきざみて、其の下に亡者の法名をしるせり。」（岩波文庫『江戸怪談集（下）』三四六頁）とある。であれば、当時は京に限らず、全国的に、死者供養のための石仏が辻に転がっていることがありえたのである。

16 傍証としては、京都市中京区西ノ京壺井町の壺井地蔵が、江戸時代に、井戸から掘り起こされたという伝承を有することが挙げられる。竹村俊則『新版 京のお地蔵さん』（前掲）一〇六～一〇七頁。同様に、正行寺内・輪形地蔵も、一六〇〇年、道から掘り起こされたという伝承を有する。岡部伊都子『京の地蔵紳士録』（前掲）一〇三頁。

17 長尾智子・他「近代京都における地蔵安置の変遷」（『平成14年度日本建築学会近畿支部研究報告集』）。

18 加藤純二『未成年者禁酒法を作った人 根本正 伝』（一九九五年 銀河書房）に引用する、同法に対する反対意見（於衆議院）を以下引用する。「未成年にのみ禁酒を命ずるのは酷でないか。日本には未成年に飲酒を強制する習慣もある。」「日本には昔から儀式に酒を用いる風習があるが、これも未成年には禁止するのか。」・「十七、八から二十歳までの未成年は成人と何ら異なる場所がない。この年齢の未成年に酒の害が特にあるのか」（一九三～一九六頁）。政治的意味合いを考慮すると、実態そのものではないかもしれないが、当時の未成年飲酒の実態の一端を現していると云えよう。なお、同書によれば、同法成立に尽力したのは、徳川家達貴族院議長とされる。未成年者禁酒法は成立（一九二三年）以後も守られず、元・部下である柳田国男は警鐘を鳴らしている。柳田国男「酒」（『昭和大正史 世相篇』初出一九三一年）。

19 森栗茂一「関西の都市と地蔵信仰」

http://morikuri.cocolog-nifty.com/achievement_of_20century/shinsai_jizou_community/02kansai_toshi_jizou_shinkou.doc

20 竹村俊則『新版 京のお地蔵さん』（前掲）一八一頁。

21 安丸良夫「民俗の変容と葛藤」（前掲）。

第三節 金沢市

表Bは、現・石川県金沢市域で、造立年代がある程度分かる、路傍の地蔵像を年代順にまとめたものである。これを見ると、死者供養を目的としたものが多い。B4は天然痘退散の伝承を持つが、造立場所は、死者供養的场所である。とすれば、京都の、怨霊供養による疫病退散と共通している。B20はみの虫払いを目的に造立された。江戸時代に於いても、害虫の発生の一因に、怨霊の祟りが想定されていた¹⁾。ゆえに、B20も、死者供養的面を持つ。天然病払い・みの虫払いは、道祖神の疫病退散と類似はしている。しかし、怨霊を鎮める役割も期待されていた。B4にしても、B20にしても無理に道祖神との習合を想定する必要はなからう。

比較的造立年代の早い、B7は道標の職能を有す。旅安全であれば、道祖神と共通するが、道標であれば、町石卒塔婆²⁾との関連をまずは考えるべきであろう。なお、現・石川県金沢市に於いて道祖神像は極めて稀である³⁾。

B6は、現在は寺の境内にあるが、かつては処刑場入口にあつたとされる⁴⁾。であれば、処刑者という非業の死者を供養する地蔵であつたのであろう。例年、八月二八日に、地蔵祭が行われる⁵⁾。B11は、藩主へ直訴をしたため、処刑された七人を供養するための地蔵である。この逸話は、金沢市に於いては「七稲地蔵」として民話となっている。処刑者を供養する地蔵は、現・東京23区域でも存する。路傍であれば、A31・A64等である。寺院内であれば、大田区大森北・密蔵院のお七地蔵が挙げられる。所謂「八百屋お七」を供養するものである。

B18・B19は、天保の飢饉で亡くなった、餓死者を供養する地蔵である。B17もこれに当てはまる可能性がある。江戸時代に於いて、他地域でも餓死者供養のために地蔵像が造立されることがある。有名ところとして、現・福岡県福岡市に複数祀られる、飢人地蔵が挙げられる。飢人地蔵は、いずれも、享保の飢饉で亡くなった人を供養するものである⁷⁾。

他の仏・菩薩との関連について、一言述べたい。現・金沢市では、原則、路傍に立つ仏像は、地蔵である。このためか、金石町・旧相生町域では、観音を地蔵と呼んでいる（序章第一節前述）。筆者が気づいた範囲、金沢市松島に、庚申塔が一基あるのみである。この要因として、①江戸時代初頭に於いて既に死者供養と言え、地蔵という観念が浸透していたこと、②浄土真宗の強い地域ゆえ、庚

申信仰や道祖神信仰が入りにくかった、の二点がまずは挙げられる。なお、浄土真宗の祖、親鸞は、地蔵信仰を否定していなかった（第二部第三章第二節前述）。

まとめ

以上、三地域に於ける、路傍の地蔵像を分析した。その結果、いずれも主に死者供養（時に非業の死者を供養すること）を目的に造立しており、道祖神との習合は見られなかった。では、冒頭で示した、路傍の地蔵像と道祖神との関係はどうして説かれるようになったのか？

『庚申利生記』（『幸神秘訣』とも。一七六八年刊）には、以下のようにある。

本国にて道路に石を建摺子木地蔵尊といへども猿田彦大神の御神形石にて男根の形に作り陽物を以糸りし古風後世六道を導く地蔵菩薩と仕替さまは習合者の混乱なり（東京大学図書館蔵本二丁表）

『神道庚申記』（成立年代不明）にも以下のようにある。

道おしへの石も本来は岐神にして、旅人の道路に不迷しめん為にせし者也。道祖神は土神なれば、妖僧の為に文字を地蔵と誤しより、（窪徳忠『庚申信仰の研究』一一〇〇頁）

『神道庚申記』の成立年代は不明だが、庚申と猿田彦との関係を説いていることから、山崎闇齋（一六一八〜八二）以降の成立であろう。

大凡庚というふも申といふも、俱に西方の金気をいふ名にして、金は万化の根底也。誠に猿田彦太神は金気を司り玉ふ神徳在て（『神道庚申記』前同一〇九九頁）

本朝庚申元猿田彦神、相傳之秘訣也、朗詠之歌、伊勢御師口傳これ有り。（漢文体の箇所を書き下し、句読点を補た。「庚申考」垂加菫、『山崎闇齋全集 第二巻 六五七頁下段

『垂加菫』の記述から、近藤敬吾は、庚申と猿田彦との関係は伊勢神道の口伝にあったが、文字で言明したのは山崎闇齋が初めてである、

とする⁸。

なお、『垂加草』の刊行は、闇齋没後である一七二一年だが、闇齋は弟子に対して、日常的に庚申と猿田彦との関係を説いていた。

猿田彦ハ日本ノ道学ノ祖ニテ候。コレニ仍山崎先生堂一其徳ヲ慕レ候由。サテ猿田彦ノ神ノ祭ヲフナレバ庚申ノ日ヂヤト仰ラレテ、庚

申ノコト、山崎先生ヨリ明ニリタルコトニテ候（『雑話筆記』、日本思想大系『山崎闇齋学派』四七九〜四八〇頁）

鈴木忠侯『閑窓随筆』（一八二五年刊）には、以下のようにある。

庚申は猿田彦命、大黒は大貴巳命、地蔵は道祖神などと神道者流よりいえる事、さらに貫本拠唯一神道とたつるもの、よく牽合附会の説をなす。笑つべし（句読点を補った・東京大学図書館蔵本第一卷八丁表）

とすれば、地蔵と道祖神との関係は、庚申信仰を媒介に、神道家が説くようになったのではなからうか？ だとすると、その時期は、本格的に路傍に地蔵像が建立された後となる。

なお『延命地蔵経和訓図絵』（一八五三年刊）でも、以下のようにあり、地蔵と道祖神との関係はなかなか浸透しなかったと考えられる。

路神とは道の神なり。道祖神といひ又道陸神或は幸の神とも号り。本朝には猿田彦の命を道祖神といふ（金沢大学暁烏文庫蔵版十丁表）

1 柳田国男『毛坊主考』（初出一九一四〜一五年）・長野浩典『生類供養と日本人』（二〇一五年 弦書房）一〇五頁・一一一頁

2 町石卒塔婆に関しては、愛甲昇寛『中世町石卒都婆の研究』（一九九四年 ビジネス出版社）を参照した。

3 滝本靖士「富山県・石川県の道祖神」（『北陸石仏の会研究紀要』第一号 一九九六年）及び私による観察による。金沢市域に於いて、

- 道祖神と無関係に左義長は行われる。小林忠雄『金沢、まちの記憶 五感の記憶』(二〇〇九年 能登印刷) 三〇〇～三一頁。
- 4 金沢市地蔵尊調査委員会『金沢市の地蔵尊』(前掲) 一二三～一二五頁。
 - 5 金沢市地蔵尊調査委員会『金沢市の地蔵尊』(前掲) 一二五頁。
 - 6 三吉朋十『武蔵野の地蔵尊 東京編』(前掲) 一六五頁。
 - 7 西野光一「福岡県における享保の飢饉と救済信仰」(『仏教文化学会紀要』第十五号 二〇〇七年)。
 - 8 近藤敬吾「山崎闇斎と庚申」(『神道宗教』第一五〇号 一九九三年)
 - 9 註8に同じ。

表B

8	7	6	5	4	3	2	1	号番理整
専光寺町ト	十一一屋祇陀十	堀川町二九	寺町五三	金石北一	石引二一十	小立野三	伝燈寺町	現・所在地
一七二九	一七一九	八〇三	り前七二よ	一七二一	一五九二	一五八二	代室末町時	代造立年
錫杖・宝珠	珠・彫り。宝立	地蔵彫立像・六	丸彫立像・合	杖舟形坐像・錫	珠・彫り。宝立	丸彫立像		像容
(台)曹洞沙	(右)享保三 (左)從是南					(背面)天正十年		銘文
カンオンサン	ガツパ地蔵	久昌寺の六		野命地蔵尊・	下馬地蔵	善光寺坂地蔵尊	カメ割り地蔵	呼称
他に観音等合祀	もとは大乗寺道。頭痛に効く	り道沿い・地蔵祭	よる秘仏の地蔵尊に	もとは大乗寺道？	行基作	桂町との境付近	道は旧上野町以前は	註記

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	
上中町新坂	一笠舞二一二	高池町	大豆田町 大豆田グラ ンド向かい	長田町一	キゴ山	小豆沢町	戸室別所町	金石西二	間明一九	一一〇一一
一八三七	一八三七	一八三四	一八〇七	八〇一四	一七八八〇九	一七八八〇九	一七八八〇九	一七六六	一七五九	
角柱板碑式・	杖・宝珠 丸彫立像・錫	舟形立像・合	掌角柱立像・合	杖・宝珠 丸彫立像・錫	り角柱浮き彫	いる 切断され像が	いる 切断され像が	び円頂丸彫及	掌丸彫坐像・合	
(角右) 天保		天保五年牛 九月	(左) 文化四 年卯蔵		(左) 醫王山 壱口越	(正面) 願主 兵衛 紙屋嘉	(右) 城紙 屋口兵衛		(背面) 宝曆 九年卯十二月二日	門機山輪叟
上中の地蔵	笠舞地蔵尊	高池の地蔵 さん	大豆田の地蔵 尊	長田町の地蔵 尊				延命地蔵尊	間明の地蔵 さま	
餓死者供養／他に	痛止め 餓死者供養・菌	隣、餓死者供養？ 元、火葬場の近 く、現・本田家墓	集落西側入口、 元、火葬場の近	長田村入口・火 除				北側の目ウラ坂 二丁目と		

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19		
千日町八	五石西四	め下田上橋詰	一谷内町木	十七森本町ル	十石西一	二石北一	一東山一三	日野山七	普正寺町九	五十三	神田二一十	登り口
江戸時	一八六七	一八六七	八五六	一八六五	五八一六	一八六〇	一八五八	一八四八	一八四四	一八四二		
十八体・中央	杖・宝珠	立像・合掌	り・宝珠	杖・宝珠	杖・宝珠	杖・宝珠	杖・宝珠	杖・宝珠	杖・宝珠	杖・宝珠	杖・宝珠	杖・宝珠
		佐丁(右)卯四月慶応三年	釋居自彰									八年四月(角左)いよし□
齒痛地藏・河	蔵尊	御塩蔵町地	んか(坂)の地蔵さ	牛坂(おつさ)	地藏さん	地藏さん	地藏さん	地藏さん	地藏さん	地藏さん	地藏さん	地藏さん
現世利益	豊漁祈願											

	30	31	32	33	34	35
二四	神谷内町七木 二と一の間	小立野五	田島町	北町丁三六	東山三十一 九十七	石引二四 寺三真行
代	江戸時	江戸時	江戸時	江戸時	江戸時	江戸時
は木製立像・ 宝珠	丸彫立像六 体・おおよそ 錫杖・宝珠	六地蔵浮き 彫り十浮き 彫り	合掌	丸彫立像・錫 杖・宝珠	丸彫立像が 八体	丸彫立像三 体
原地蔵尊	上野の地蔵 さん	鶴間谷清水 の地蔵尊	ウマゾンバの 地蔵さん	北町の地蔵 さん	延命地蔵尊	
	ムラ入口・明治初 期に廃寺より集 める	旭町三との境	馬埋場	金石街道沿い・現 在・地付近には 治初年に移転 弁財天等合祀	真行寺地蔵の堂 祀あまた三の 蔵のうち代、 が江戸あつた が江のうち代 詰めにあつた 伝わる	

金沢市地蔵尊調査委員会『金沢市の地蔵尊』（前掲）を基に、二〇一〇～一四年に於いて、現地調査を行い、見つからなかったものを除いた。現在、寺で祀られているが、かつては路傍に在ったとされるものを含めた。現地調査の結果、墓地と結びついているものは除いた。銘文は同書によったものもある。B 29～B 35は順不同。

第四章 「賽の河原地蔵和讃」の成立と普及

安土・桃山時代に賽の河原という観念が生じ、熊野比丘尼等がこのことに関し、絵解きを行い、普及していったことを第二部で論じた。

江戸時代に入ると、「賽の河原地蔵和讃」が成立し、普及してゆく。普及の原因としては、前代にも増して家が確立されたため、前代以上に、子どもが家の宝となったことが挙げられる。なお、「賽の河原地蔵和讃」には様々な異称があるが、用語としてはこれに固定して分析を行う。

戦国時代の絵解きに於いても、類似した和讃が唱えられた可能性はあるが、文献で確認できるのは江戸時代である。第二部で言及した、一六〇三年書写『富士の人穴草子』には、賽の河原は登場するが、「賽の河原地蔵和讃」の基本要素と云うべき、石積や鬼による責めはなく、地蔵も出てこない。一六二七年刊『富士の人穴草子』になると、石積が描かれ、地蔵も登場する。

まず、さいのかわらをみせんとてたち出給ふ。ここにかわら有り、此のかわらに、二つ、三つ、七つ、八つ、十二、十三のおさなきものどもが出、千萬ともかずしらすなみあるたり。かのかわらに、おさなきものがいしたうをくみあけてをけば、あくふう出てふきちらかす。それをあつめて、くまんくまんとする所に、かたはらよりくわゑん出て、いしもかわらもほのほにもへければ、おさなき者ども、ほのほのくかんのかなしみ、にげんとすれどもにげもやられず、「ちちよ、ははよ」とさけばとも、そのかひもなかりけり。さて、ほのほにもえてはつこつとなる。

ややるはるありて、じざうぼさつはしやくちやうをもてかきよせて、もんにはやく「・・・」と。このもんをとなへ給へば、元の形になりけり。・・・(平山鏗二郎『室町時代小説集』八一九〇八年 精花書院V九九頁)

石積は出てくるが、石を崩すのは鬼ではなく、風である。炎が燃えているので、地獄の異種ではある。幼児が白骨となるのは、一六〇三年版の継承である。第二部第九章第五節の論述と合わせて考察するに、賽の河原という観念は、一気に成立したのではなく、様々な形があり、徐々に整理されていったのである。

一七一五年刊『西院河原口号伝』になると、典型的な賽の河原地蔵和讃が引用される。

コレハコノ世ノコトナラズ 死出ノ出路ノスソ野ナル
西院ノ河原ノモノガタリ キクニツケテモアワレナリ

二ツヤ三ツヤ四ツ五ツ 十二モタラズミドリ子ガ

ツミタル塔ヲオシクズス ソノトキ能化ノ地蔵尊

ユルギ出サセタマヒツツ . . .

イマダアユマズミドリ子ヲ 錫杖ノ柄ニトリツカセ (国書刊行会『仏教説話集成「一」』三九九〜四〇一頁)

安土・桃山時代の六道絵に於ける賽の河原でも、地蔵に取りすがる子どもという図柄があったが、ここに来て、和讃に取り入れられたことが確認される。

「賽の河原地蔵和讃」は、この後、種々のタイプが生まれる。真鍋『地蔵菩薩の研究』(前掲)には約十種が収まられている。

「賽の河原地蔵和讃」は如何なる場合に唱えられたのか？ まずは地蔵祭である。現在、京都の地蔵盆に於いて、「賽の河原地蔵和讃」が唱えられることがある。これは江戸時代の地蔵祭に遡れるものである。というのも、『鳴原大和暦』に以下のようにあるからである。

廿四日を又この内のもの日とす六地さうまいりなどをついへるとぞ子にはなれたるおやともとうろうをちさうにたてまつるなり
もしもし上ろうしうにも子にはなれ給あるならばとうろうをく (国会図書館蔵本第一卷九丁裏〜十丁表)

念のため、漢字に直せる箇所を直し、句読点を補うと以下ようになる。

廿四日を又この内の物日とす。六地蔵参りなどをついへるとぞ子に離れたる親とも灯籠を地蔵に奉るなり。もし上臈衆にも子に離れ給あるならば灯籠置く

地蔵祭に於いて夭死者供養を行っていたことを記しており、であれば、「賽の河原地蔵和讃」が唱えられていた可能性が高い。京都の六地蔵めぐりを歩いて行っていた頃には「賽の河原地蔵和讃」が唱えられていた。問題は「歩いて行った」時期だが、昭和三〇年代には、京阪電車とのタイアップが行われているので、これ以前を指す。なお、群馬県では、地蔵盆に際し、「賽の河原地蔵和讃」が

唱えられることがある⁴⁾。

江戸時代には六道絵が各地で作成され、その中には賽の河原が描かれることが多い⁵⁾。これらの六道絵が絵解きされる場合、賽の河原地蔵和讃が唱えられたと考えられる。大念仏の一環として唱えられることもあった⁶⁾。

山伏等の宗教者が「賽の河原地蔵和讃」を歌祭文の一節として唱えたこともあった⁷⁾。山東京伝『本朝酔菩提全伝』では、女が墮胎薬を呑もうとする場面で、門経者が制止のため、「佐比の河原の説経節」（賽の河原地蔵和讃の一種）を唱えている。

子は再び得らるべし。親は再度得べからず。いかに思ひ翻しても飲ねばならぬ此薬と覺悟極めし折しもあれ折戸の外にイみし門説經の修行者が生死長夜にたとたる長柄の傘を打かたげ佛の教經文を俗に関する説經の鯨の竹の井井菩薩節も唱歌も殊勝にて専哀を添にけり。

歸命頂禮世の中の定め難きは無常なり。親に先達有様に諸事の哀れを止めたり。一ツや二ツや三ツや四ツや十より内の幼子が母の乳房を放れては佐比の河原に集りて……唯願くは地蔵尊迷ひを導き給かしとぞ唱ける。

呑晒は暫時これを聞居しが時も時折も折とて佐比の河原の説経節あな心なや思ひをませとの事なるか此世に出ぬかには罪も報もあるましきとと思ひしにあれ……（句点を補った。四字落としての箇所は原文二字落とし。『京伝傑作集』博文館版一四三〜一四四頁）。門経者が、普段から賽の河原地蔵和讃を唱えていた証左と云えよう。

さらに「のぞきからくり」の古いネタである「地獄極楽」⁸⁾には賽の河原の場面があり、その際に賽の河原地蔵和讃が唱えられる場合もあった⁹⁾。『西鶴大矢数』一六八〇年催には以下のようにある。

出来坊さいの川原にすたりたり（第十六卷、『西鶴大矢数注釈 第二卷』二九七頁）

出来坊は操り人形のことであり、「のぞきからくり」に於いて賽の河原が演じられたことを示している。

こうした状況に於いて、十種以上の「賽の河原地蔵和讃」が生まれ、民衆に賽の河原に於いて、夭死した子どもの救済する地蔵という観念が広がったと考えられる。第二章で述べた通り、江戸時代は檀家制の時代であり、人々は檀那寺の言いなりに葬式・法事等の死者供養を行わなければならなかった。地蔵の死者供養の機能は、全く無くなってしまった訳ではないが、新たな説話は形成されにくく

なった。一方、「賽の河原地蔵和讃」の普及によって、天死者供養という機能が普及していったのである。

1 森栗茂一「関西の都市と地蔵信仰」

http://morikuri.cocolog-nifty.com/achievement_of_20century/shinsai_jizou_community/02kansai_toshi_jizou_shinkou.doc

2 竹村俊則『新版 京のお地蔵さん』（前掲）二〇三頁。

3 田中悠文「京都における地蔵菩薩信仰をめぐる」『現代密教 第二一号 二〇一〇年。

4 都丸九一『地蔵行事の概要とその和讃集』（一九五五年）。

5 渡浩一「幼き亡者たちの世界」（前掲）。

6 『日本庶民生活史料集成 第十七巻』七五一頁。

7 関山和夫『説教の歴史』（一九七八年 岩波新書）一五六―一五七頁。

8 「地獄極楽」は昭和三〇年代まで続けられたネタであった。板垣俊一『江戸期視覚文化の創造と展開』（二〇一二年 三弥井書店）一二二頁。ここで「賽の河原地蔵和讃」が唱えられたことが、一九七〇年代以降の水子供養ブームに繋がる（第四部後述）。

9 板垣俊一『江戸期視覚文化の創造と展開』（前掲）一二二頁。

10 関山和夫「地獄絵の絵解き」（林雅彦編『絵解き万華鏡』一九九三年 三一書房）。

第五章 現世利益とその間接化・不公平化

第一節 現世利益の拡大

(1) 眼病治し

江戸時代の地蔵説話集を見ると、現世利益の職能としては、眼病治しが多く、計二五話を数える¹（この場合の眼病とは目が見えないことを含む）。一番早いのは一六三九年刊『さんせう大夫』だが、前述の通り、語り物としての『さんせう大夫』は中世に遡れる²。無論、『さんせう大夫』の盲目の母は特別な状況に置かれた筋だが、江戸時代の地蔵説話では、市井の人が普通に困っている話ではある。江戸時代は、中世よりは共同体に余裕ができ、目の見えない人でも共同体を離脱しなくとも良いことが増えた³。とはいえ、目が見えた方が便利であり、眼病を治す祈願を多くの人が行い、地蔵がこれを救済すると信じられるようになったのである⁴。なお、『さんせう大夫』の布教者として一つには瞽女（盲人）が挙げられる⁵。瞽女は、自身の希望も込めて、『さんせう大夫』を語ったと考えられる⁶。

眼病治しの地蔵の代表格として、近江国木の本（現・滋賀県長浜市木ノ本）・浄信寺（時宗）が挙げられる。浄信寺を舞台とする説話は、『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』第四卷第十三話の一節、第三卷第六話・第八話、『応驗新記』上末第三話・下本第四話・第八話・第十二話が挙げられる。いずれの話も筋が異なる。

時衆と盲人との関係は、『一遍聖絵』にまで遡ることができる。片瀬浜の地蔵堂で踊念仏する場面に、琵琶を背負い、杖を突く法師が描かれている「章末絵一」。これは時衆の周辺に盲人が含まれていたことを意味する⁷。その後、空也の市屋道場跡に、金光寺（時衆）が立てられ、この地縁に於いて、時宗の聖と琵琶法師との親密な関係が生まれる⁸。であれば、浄信寺の地蔵像の眼病治し説話を語ったのは、盲僧であった可能性があるが、推測の域を出るものではない。

京都府京都市左京区に在る聞名寺は、一遍によって再興された時宗寺院である。同寺の地蔵堂に祀る明眼地蔵は、盲人たちが、盲人を保護した光孝天皇の遺徳をしのんで造立したものと伝わる⁹。これも時衆と盲人、地蔵との三者を繋ぐ事例の一つである。

(2) 日常的なレベルの救済

生死には関わらない、日常的に困るレベルの事柄を地蔵が解決する話も増えてくる。例えば、『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』第九巻第四話は「白髪。黒髪に転ずる事」である。主人公は女性である。髪は女の命かもしれないが、生まれながら白髪であつても生命の危機とはならない。

彼女、生得髪ノ白コト、老女ノ如シ。．．．或人ノ曰、「矢田寺ノ地蔵コソ、靈驗無双」ト聞ナレバ、彼寺ニコモリ、マコトヲツクシテ祈ケリ。三七日ノ曉、夢中ニ、サシモケタカキ御僧ノ、杖ノホトリニタチ玉フハ、．．．夢サメタリ。．．．トカクスルスル内ニ、黒髪ユタカニ生出タリ。(前同八六〜八七頁)

『地蔵菩薩利益集』(一六九一年刊)第三巻第十六話は、顎の外れを治す話である。

頰のかけがねはづれて。．．．食事もかつてくふ事をあたはず。．．．醫師を頼。いろいろ方便をめぐらせども。すべてそのしるしなし。．．．初夜過に。くだびれはてて。．．．葛籠町の地蔵菩薩とおぼしきが。御出あつて。自慈悲の御手をもつて。かの清兵衛が頬をおしなるさせ玉ふとおぼえしが。．．．葛籠町の地蔵菩薩の。我頰のかけがねをかけたまへり。(私架蔵本三〇丁表〜三一丁表)

『延命地蔵菩薩経直談鈔』(一六九七年刊)第七巻第四八話は、子の歯が出てくる話である。

何其ノ子息十四歳マデ齒生ザル故ニ(前同五六二頁)

『延命地蔵菩薩経直談鈔』第三巻第六六話は、地蔵が女人の代わりに裸体をさらす話である。

昔平ノ時頼其ノ婦人ト雙六ノ勝負ヲ争ヒ互ニ裸ニナランコトヲ賭ニシケリ婦人負テ地蔵ヲ念ズルニ忽チ女體一變シ局ノ上ニ立ト云ヒ傳フ(前同三〇三頁)

『延命地蔵菩薩経直談鈔』第六巻第三話は瘡を治す方法を教えてくれる話である。

背ニアヤシキ瘡出テ紫色ニハレ。．．．醫師モ心エヌ瘡ニテ療治ノ効モナカリケレバ。．．．其夜彼僧カ夢ニ氣高老僧錫杖ヲ携来リ枕上ニ立セ玉ヒテ。．．．汝ガ瘡ニハ是ヲ塗ベシトテ酸漿ヲ一袋玉ルト思ヒテ夢覺タリ。．．．三日目ニ悉ク平愈シ(前同四四七頁)

『延命地藏菩薩經直談鈔』第九卷第六五話は、大切な落とし物を届けてくれる話である。

町人大事ノ手形ヲ多ク入レタル鼻紙袋ヲ落シ・・・八十バカリナル老僧不圖家ニ入り庭ニ立ナガラ其方落タル鼻紙袋ト云 是カト座敷
へ投テ・・・亭主先ノ老僧ハ誓願寺地藏尊ノ化現ナルコトヲ感得シ・・・(前同六八四〜六八五頁)

『延命地藏菩薩經直談鈔』第十一卷第二六話は、盗人のために牛馬の毛の色を替えてくれる話である。

長半ハ盜賊ノ大将ニテ東海道ニ出テハ牛馬ヲ恣取テ・・・白キ馬ヲ盜テハ黒キ馬トシ又赤馬ヲ盜テハ青馬ニシ玉ヘト地藏ヲ祈リテ
ハ忽ニ毛替テ馬主知ラズ長半心ノ儘ニ牛馬ヲ賣買スルコト多シ(前同七七五頁)

盗人の便宜を図って良いのか、という問題は第三節で言及する。

『地藏菩薩応驗新記』(一七〇四年刊) 上末第七話は、僧が忘れてしまった、印言を覚えてくれる話である。

十輪堂に入て修法を始。時既に後夜なるに秘密八印に至て忘却し、思惟すれども得ず。・・・覺ず睡眠して時を移しけるに、夢中
に端巖の僧卓案の側より忘却せし印明を教給へは、悦び醒て傍を見るに、更闌寂寞として人影なし。疑ひも無く菩薩の冥助なれば、
(国書刊行会版三七頁)

『地藏菩薩応驗新記』上末第八話は、紛失した傘の所在を覚えてくれる話である。

雨の後に傘を二本持ちて石像の前を過けるに、雨晴ければ、此傘用なしとて二本の傘を石像に打持せて、「地藏、預もうすぞ。我
帰まで能々守りて人に奪れめさるな」と言ひて打過けり。少時有て帰見るに、傘の無かりければ、・・・女子の五六歳なるが、俄
に乱心のやうにて成て・・・高声に叫れば、走ければ、人々怪しく思ひ、とりとりに傘を尋しに、児女の親の所に有けるとなん。
・・・是菩薩の少女をして傘の所在を知らせ給ふなりと、(前同三八頁)

『地藏菩薩応驗新記』中末第七話は、跡継ぎのための女子を得る話である。

加州金城府の侍臣千福氏某、娶て二十年来、終に一子も得ず。・・・夫婦亦誓て曰、「もし男にもあれ女にもあれ、我に一子を授与
し給はは、其子一生菩薩に帰敬し、毎月二十四日ごとに、齋戒精進し、人を代しめて宝前に拝詣せしめん。我等亦一生宝号を口称
し、慈恩に報答し奉ん」と、昼夜懇禱す。翌年二月、彼婦懷孕し、十一月某日に一女子を産し、無病端正に生長す。(六四〜六五頁)

『地蔵菩薩応驗新記』上本第八話の一節は、疥癬を治してくれる話である。

元禄四年に大坂道頓堀塗師坊紙屋某が婢浅といふ者、疥癬周身に発して痛痒最堪がたし。当院の尊像を祈るに、一七日を経て医せずして瘡自癒。(二九頁)

中世ではどちらかというと、生死に関わる重要な事柄の救済であったが、江戸時代になると、これに加えて、日常的な事柄の救済に広がっている。この為、江戸時代の地蔵説話集には、職能を示す苗字が多数記されている。例えば、『延命地蔵菩薩経直談鈔』には、六二種が見られる(前述)。このことは、他の仏・菩薩に比べて顕著である。中世以来、地蔵は庶民にとって身近な存在であったため、身近な現世利益も担うようになった。この為、苗字が多数出現したと考えられる。

第二節 間接化

中世に於いて、概して、地蔵は現世に生身で現れ、現世利益を施してくれた。このことは江戸時代でも認められる。『延命地蔵菩薩経直談鈔』第七卷第二話には、以下のようにある。

夜ノ夢ニ汝イマダ田ヲ作ラザル事ヲ悲ム間々我作ツテ與ント言テ若ナル僧來リ玉フト見テ明方ニ目覺ケリ。道ヲ通モノ聲ニテ昨日デ作ザリシ田ヲ夜ノ間ニ何者ノ作りタルラント云ヲ聞……是ニ由テ此地蔵ヲ田作地蔵ト呼奉ツルト。ハ寶物集一由タリ(句点を補った。勉誠社版五〇一〜五〇二頁)

『宝物集』所収の類話(第二部第九章第三節にて引用)と同一の筋ながら、夢に若き僧が出現し、現世で田を耕す姿も目撃されている。『宝物集』では、姿が明らかになっていないことと対照的である。中世に生身の地蔵という觀念が定着したため、追加されたものと考えられる。

しかしながら、生身が登場することなく、現世利益を授けることも江戸時代になって、顕著になってくる。例えば、『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』第九卷第八話は、印仏によって、疫病にならない話である。即ち、生身の地蔵は登場しない。

香箱ノ中ヨリチイサキ地蔵ノ印板ヲトリイダシテ、香箱ニ印シテ授ケ玉イケル。女人受得テ、毎日一千体香水ニ印シタテマツリ、